

## 「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」から シェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その一

草 薙 太 郎

### 1. はじめに

文部科学省科学研究費補助金やドル減らし予算などを使い、富山大学人文学部の研究室に1990年頃から収集し、随時オンラインのデータベース化に取り組んでいる米国シェイクスピア研究学位論文のコレクションから、米国の文化的特徴が読み取れる。それを「『データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文』が表す米国の特徴 その一」<sup>1)</sup>「その二」<sup>2)</sup>としてまとめた。

その成果をもとに、シェイクスピア=ベーコン説を検証することができるとし、一連の論文発表を計画・実行している。またその過程で、「テロ対策」という今日的な問題との深い関わりがあることに気付き、検証に組込んでいる。そのことを以下にまとめて提示したい。

データベースの分類項目と対応する発表論文は以下の通りである。(分類項目を列挙し、その後に対応する発表論文名を提示する。)

#### (1) 移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴

- (a) 心理学、臨床心理学などに関連するもの
- (b) 枠にとらわれない米国流自由研究
- (c) 映画に関連するもの
- (d) 多民族国家、植民地政策などに関わるもの

以上のうち(a)(b)を「『データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア=ベーコン説を検証する その一」<sup>3)</sup>としてまとめ、(c)(d)を「その二」<sup>4)</sup>としてまとめた。

#### (e) 語学的考察に近いもの

---

1) 富山大学人文学部紀要第40号 (2004).  
2) 富山大学人文学部紀要第42号 (2005).  
3) 富山大学人文学部紀要第44号 (2006).  
4) 富山大学人文学部紀要第45号 (2006).

- (f) 実際に演じることからの論考
- (g) ホモセクシュアルに関わるもの

以上を本稿である『『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に『テロ対策』との関連を探る その一』<sup>5)</sup>としてまとめる。今回からシェイクスピア＝ベーコン説を検証することであぶりだされる米国の特徴と、「2001.9.11のテロ」以来、世界的な問題となっている「テロ対策」とが、深い関係にあることに重点をおいて論じてゆく。

- (2) そうはいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴
  - (a) 主として英国と関連するもの
  - (b) 英国以外の西欧各国文化と関連するもの
  - (c) 西欧文化全体と関わるもの

以上を『『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に『テロ対策』との関連を探る その二』<sup>6)</sup>としてまとめる予定である。

- (3) 競争社会として社会のヒエラルキーを駆け上がりマイノリティーがメジャーになろうとする（フェミニズムが典型）圧力のある特徴
  - (a) フェミニズムに関するもの
  - (b) 社会学的な考察をするもの
  - (c) 政治に関わるもの

以上を『『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に『テロ対策』との関連を探る その三』<sup>7)</sup>としてまとめる予定である。

さらに、上記の論文発表では、「テロ対策」との関連を特に考えてこなかった(1)(a)(b)を再考して「その四」<sup>8)</sup>としてまとめ、同じく(c)(d)を「その五」<sup>9)</sup>としてまとめる予定である。

なお、一連の論考は、随時更新されたデータの、発表時での最新データに基いている。また、

---

5) 富山大学人文学部紀要第47号 (2007).

6) 富山大学人文学部紀要第48号 (2008). (予定)

7) 富山大学人文学部紀要第49号 (2008). (予定)

8) 富山大学人文学部紀要第50号 (2009). (予定)

9) 富山大学人文学部紀要第51号 (2009). (予定)

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

本稿は、学術論文形式のデータベースの役割を果たすため、脚注の学位論文には富山大学附属図書館の請求番号を付してある。

(e) 語学的考察に近いもの

さて、データベースの分類項目「(1) 移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴」の細目である「(e) 語学的考察に近いもの」について考察する。

この項目ではシェイクスピアの翻訳、テキスト研究や実証的な伝記の作成方法など、密接に関連したものも含め、「シェイクスピアの普遍性」をめぐる考察を含むものとする。

米国シェイクスピア研究博士論文で、一切意味に立ち入らず、ソネットの意味の切れ具合のみ(会話的な終わり、意味のまたがり等)を論じたもの<sup>10)</sup>がある。『ハムレット』をコミュニケーション論で解析する論考<sup>11)</sup>がある。これらは語学的考察として、少なくとも資料としてシェイクスピアを選んだ理由を特に説明しない点において、「シェイクスピアの普遍性」に寄りかかっている面がある。その「シェイクスピアの普遍性」とは何かを考察すれば、そこにシェイクスピア=ベーコン説が関わってくる。

この点に参考になる論考として、「シェイクスピア作品に見出される普遍性」と題した論考<sup>12)</sup>がある。多文化主義の立場(アメリカで様々な異文化の吸収を推進する立場)に立つ学習プログラムから、シェイクスピアはヨーロッパ主義、家父長主義(これまでアメリカが異文化の吸収を阻んできた要素)が強いとして排斥される傾向があるとみる。これに反論し、多くの言語に訳され、世界で上演されるシェイクスピアは「普遍的」であるとする。

多文化主義の立場の学習プログラムとは、まさに「2001.9.11テロ」以降の状況の中で、いわゆる「ネオコン」を中心としたイラク戦争推進の動きがある一方、アメリカの孤立を防ぎ、様々な異文化の吸収を推進する立場があることを伺わせる。これまで西欧文化の古典として位置づけられ、「普遍性」を謳歌していたシェイクスピアが学習リストから外される傾向を巡る論議の意味は何であろうか。

イラク戦争では米国に協力し軍隊を派遣した英国は、同時にイスラムとの融和もはかっている。シェイクスピアとの関連でいえば、シェイクスピアがキリスト教一辺倒ではなく、その複雑な人間理解にイスラム的な面もあることを、イスラムの識者が語り波紋を広げている。その

---

10) Hawkins, Paul, *Toward a Practical Poetics of Rhythm: Kinds of End-Stop and Enjambment*, (1995). MF||189||1

11) Lortie, Denis, *Pour une Approche Pragmatique de la Communication dans la Tragedie d'Hamlet, Prince du Denmark, de William Shakespeare*, (1995). MF||189||2

12) Remillard, Gerard J., *Universality found in William Shakespeare's works.*(2003).CR||291||1.

論争が「シェイクスピア＝イスラム教徒説」にまで発展することの当否はともかく、英国の一つの精神的支柱であるシェイクスピアに言及させる形にまで英国でイスラム教徒に発言の機会を与える英国の配慮が目立つ。

これに対しアメリカは「2001.9.11テロ」発生時には、イラク戦争に突入し、ジョン・レノンの「イマジン」さえ歌うことを禁止する動きがあるかと思うと、一転して異文化吸収の一環としてシェイクスピアをリストから外す傾向が目立つようになって、これを批判する論文が出現する事態になったりもする。ロンドン同時多発テロの発生時にブレア首相が一般のイスラム教徒に罪はないことを訴え、必要以上にイスラム教徒との軋轢が生じることを防ごうとした態度とは対照的である。(これだけを見れば英国がアメリカに勝るように受け取れる。しかし、後述のように英国には階級性の残存という問題がある。アメリカの行動は「チャンスの平等」という民主主義の基本を守ったゆえという面があることを後で述べたい。)

この英米の違いは古典の取り扱いについて、二つの対照的な態度を示唆している。

それは「座右の銘の供給源としての古典」観と、「純粹客観的な研究対象としての古典」観である。前者は大衆の嗜好を取り込み、古典から「座右の銘」的な教訓を汲み取ろうとする方向を精妙に発展させたものであり、後者は大衆に迎合せず、古典を純粹に客観的に取り扱おうとする態度である。ただし、ここでいう「大衆」については概念規定に再考を要する。

「座右の銘の供給源としての古典」観と「純粹客観的な研究対象としての古典」観との対立軸は、アメリカと英国の対立軸、「大衆的なアメリカ」と「インテリ中心の英国」の対立軸を念頭においたものながら、「純粹客観的な」という表現に、少し曖昧な点がある。「純粹客観的な研究対象としての古典」観とは、一体何であろうか。それは、シェイクスピア作品が十六世紀の終わりから十七世紀初頭にかけてのロンドンで生み出されたという「純粹客観的な」事実を認識し、そこからあまり離れないことを意味している。言い換えれば歴史的、地理的文脈を外さないということである。

そもそも「座右の銘の供給源としての古典」観とは、古典を初めから終わりまで読む根気や暇がない人が、文脈から切り離された言葉で古典を代表させようとするものであり、実践をする人か、文脈を読み取る「いわゆる学がない」大衆の古典観というように、やや認識の浅い古典観であるとして、軽蔑的に捉えることが一見可能に見える。

確かに「座右の銘の供給源としての古典」観と「純粹客観的な研究対象としての古典」観との対立軸とは、「古典の文脈を無視し、キーワードだけ取り出す古典観」と「古典が成立する様々な文脈を尊重する古典観」の対立軸である面は否定できない。

その「様々な文脈」の何を選ぶかが重要である。

アメリカの場合は、「キーワードだけ取り出す古典観」から出発し、さらに古典を初めから終わりまで根気よく読んだ上で、なおかつ人生の意味や人生を生きる指針を読み取ろうとする

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

「座右の銘の供給源としての古典」観の精妙な発展になっている。それは文脈を無視したというより、実践を念頭においた人生論を汲み取るための思想的文脈といったものを尊重したとも解釈できる。

それが、意外にも古典の訓古注釈で何千年の歴史があつて、しかも共産化を経て、共産党の一方独裁を外さないまま市場経済を発展させる中国のシェイクスピア受容に酷似する面がある。

このことをはっきりさせるため、アメリカについて考察する前に、中国での最近までのシェイクスピア受容を詳細に記述した論考<sup>13)</sup>を説明しよう。

「シェイクスピアは多様ななまりがあるエスペラント」<sup>14)</sup>とする論考ながら、この論文くらいシェイクスピアの「普遍性」を示すものはない。まずイデオロギーとして捉えるとき、シェイクスピアは墮落したブルジョア文化の象徴とされ、シェイクスピアを中国に好意的に紹介する動きがすべて弾圧された(シェイクスピア祭や、学生によるシェイクスピア劇の上演を企画した大学教授が当局の取り締まりの対象になった)時代があつた。逆に文化大革命期などには、毛沢東思想と結びつける努力がなされることにもなる。実際に迫害が行われる国柄の中で、どんなイデオロギーの器にもなる特質を示す。

論考のそもそもの目的は中国から見た文化的唯物論評価である。文化的唯物論とは市場経済を念頭においた文芸批評とする捉え方ではなく、中国ではマルキシズムとの生な葛藤があることを示す論考になっている。

中国を含め共産圏ではゲーテからツルゲーネフを経てハムレットとドンキホーテを結びつける伝統<sup>15)</sup>がある。つまり翻訳の問題としても、「生か死か(このままでいるか、いないか)、それが問題だ」で始まるハムレットの独白を、「死後も人は存在するか非存在になるか」「戦うか戦わないかそれが問題だ」といった風に中国語では訳す試みがなされる。哲学、イデオロギーの背景なしに翻訳はありえない事情とも密接に関連する。「革命を念頭においたインテリの逡巡」がハムレット=ドンキホーテという存在で、ハムレットは人民解放という意味の「ヒューマニズム」体现者で、人民解放のために主張すべきか否かでためらい、ドンキホーテと重なりながら、当局に迫害されながら主張するインテリの象徴イメージにもなる。

フェミニズムは中国に根付かず、シェイクスピア劇の登場人物は、ポーシャなど、解放された女性として憧れの対象になる。イアゴーなど悪の系譜は社会悪と捉えられる。九十年代以降、市場経済が浸透し、シェイクスピアも哲学を失って俗化したと論考は指摘する。これは、必ず

---

13) Yang, Lingui, *Materialist Shakespeare and modern China*, (2003). CR||291||1

14) Ibid, p.2.

15) Ivan Turgenev, *Hamlet and Don Quixote*, (1860).

しも日本のように、文化的唯物論を援用したシェイクスピア批評が、超イデオロギーの文学としてシェイクスピアをとらえ、テキストの読みに市場経済を念頭におくだけになったともいえない。社会理念としての「イデオロギー感覚」は根強く残っている。

あるいは、この点の解釈として七十年代の日本の演劇事情を振り返れば分かりやすいかもしれない。女性がジーンズを履くことを年配者の一部から非難される状況（都内のさる大学でドイツ人の大学教師がジーンズを理由に女子学生の受講を拒否したことが報じられると、ジーンズを履いて何の学問かという調子で、学問とは縁がなさそうな世の姑たちがドイツ人教師を、中国流に言えば「熱烈支持」し、嫁のジーンズを非難する大合唱が起こった）の中で、渋谷のジャンジャンという当時先端的な空間の中で、ジーンズを履いて展開するシェイクスピア・シアターのシェイクスピア劇の中で活躍する女性主人公たちは、解放された女性としての憧れの対象でなかったとはいえない。ただし、日本では憧れの対象というほどに女性の解放（ジーンズを履くという意味なら）を阻むものは強くなく、「解放」は急ピッチで進んだ。女性がジーンズを履くことは日本中に浸透し、ジーンズを履くという意味にこめられた、伝統的な良妻賢母型の女性から、英米型の自立する女性への転換が、着実に始まったといえるのではないか。

同時並行して演劇界では木下順二が活躍し、「夕鶴」の公演が記録を更新していた。「夕鶴」のテーマを、無償の愛が市場経済で毒され、市場経済論理で生きる人物が社会悪として描かれると捉えれば、上記中国でのシェイクスピア受容を彷彿とさせる。木下順二が一方で当時シェイクスピア学会の中心であった小津次郎と親交を深め、その死に際して葬儀委員長をつとめたほどであったことを考えれば、そこに中国でのシェイクスピア受容に似た点のみとめても間違いではないと思う。シェイクスピアを強く意識した劇作家である木下が「夕鶴」を書いた。「夕鶴」の世界は、そのまま現代中国の、フェミニズムが根付かないという意味でフェミニズムに関する、シェイクスピア受容の姿なのだ。

ロシア、中国という左翼的思想傾向をひきずる国のシェイクスピア受容に似た傾向が日本にもあったし、木下順二は、決してプロレタリア演劇作家ではなかったが、深いところで、その傾向を秘めていた。そうした木下順二を含む終戦直後の空虚と復興を精神的に深く受け止めたインテリが日本文化のアイデンティティーを考えていたように、中国の現代のシェイクスピア受容にも、中国文化のアイデンティティー問題があることを、この論文は指摘する。

中国服のオペラなど、すでに中国のシェイクスピアは定着し、それと、バレエのステップをとり入れた、さらなる西欧化が問題になる。中国服を着て中国語で歌う『十二夜』というオペラがすでに中国で定着し、その踊りにバレエのステップをとりいれただけで違和感を覚える観客が存在するという事に驚かされる。

それにひきかえ現代日本が、家父長の支配に反発するフェミニズムを含め、家族の問題として、どれだけイギリス本国のシェイクスピア劇の捉え方に共感する面があるかもわかる。知ら

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

ぬ間に日本のシェイクスピアの観客は、そのうちの女性がジーンズを履き、英米型の自立した女性をめざすだけでなく、もはや、英米の女性と問題意識をともにし、一部ではフェミニズムの立場からシェイクスピアの保守性を非難するまでに立ち至るほどに変貌していたのだ。同時に、女性が変われば男性もそのパートナーとして変化せざるを得ない。シェイクスピアが描く英米型の家族の問題を自分たちの問題として受け止めざるを得なくなる。ただし、原作にある権力に刃向かう危険をおかす感覚を現代日本は忘れていた面も、この現代中国を考察した論考は気づかせてくれる。

以上の考察に、「座右の銘の供給源としての古典」観と「純粹客観的な研究対象としての古典」観との対立軸を適用するとどうなるであろうか。

中国と日本では、訓古注釈の伝統という共通するものがある。訓古注釈の伝統は、文献を精査し、一見文脈を尊重するように見えて、意外に歴史的、地理的文脈を無視するのではなからうか。

それが証拠に、孔孟の思想といいながら、孔子や孟子が、どこで、いつ生まれたかに始まる、歴史的、地理的文脈を意識する伝統が中国や日本にあったとは思えない。最近になって日本でも孔子が生まれた故郷で孔子の一族が現存することが報じられ、関心を集めていないわけではない。しかし、そのことと江戸時代以来の孔孟崇拜、儒学の伝統とは、はっきりいって無関係ではなからうか。訓古注釈の伝統は「座右の銘の供給源としての古典」観に近い。「論語読みの論語知らず」ということばは、文脈に拘泥して、実践に結び付けられないことを非難しているとしか思えない。実践に結びつく「座右の銘の供給源としての古典」観の方が中国でも日本でも歓迎されたのではないか。それは中国では孔孟の思想が毛沢東思想になっても、思想を学習し、思想を象徴する座右の銘的な言葉を集団で唱えて実践しようとする姿勢に受け継がれているように見える。その方が実践に直結しやすい。日本でも、江戸時代以来の訓古注釈の伝統に立つ「座右の銘の供給源としての古典」観を軍部がねじまげて発展させ、忠君愛国の座右の銘の下、第二次世界大戦の実践にまで、そうした傾向は続いた。

戦後の民主化という名のアメリカ化の流れが、七十年代にいたり、日本のシェイクスピアの観客のうち、女性が「良妻賢母」から「自立する女性」に変貌したとき、日本ではようやく、少なくともシェイクスピアに関する限り、「座右の銘の供給源としての古典」観の伝統が断ち切られたのかもしれない。

演劇の観客は研究者ばかりではないので、それがただちに「純粹客観的な研究対象としての古典」観につながるわけではない。

「純粹客観的な研究対象としての古典」観を日本の学界に持ち込んだのは小津次郎であった。小津次郎は英国留学によって実証的なシェイクスピア研究方法を学び、日本に持ち込んだ。

その後、小津と同じように英国の知性の影響を受けた日本の英文学者は多く、日本の英文学

者がシェイクスピアについて、その歴史的、地理的文脈を外すことはなくなった。そうした研究者が提供する翻訳によって、あるいは英語の浸透で、本場の劇団の来日公演やロンドンに出かけて現地での公演を楽しむ観客が増えてきて、同時に、日本社会の英米化が進んだ結果、現代日本の観客がシェイクスピアについて、その歴史的、地理的文脈を外すことはなくなったのではなかろうか。むしろそうした文脈を尊重しているのが英国と日本の研究者や観客だと思う。

しかし、アメリカのシェイクスピア研究は、ぎりぎりのところで歴史的、地理的文脈を外さないようにしながら、それを尊重するのではなく、できれば無効にすることを狙っているのではないかとさえ思われる傾向がある。

そのことがイスラム過激派テロに対する英国とアメリカの対処の違いに反映しているのではなかろうか。つまり「座右の銘の供給源としての古典」観か、「純粹客観的な研究対象としての古典」観かという、この二つの態度は軍事と絡んでいる。

オークランド紛争時に英国軍の司令官が心を落ち着けるためにシェイクスピア詩集を携帯すると言って注目された。つまり英国にも「座右の銘の供給源としての古典」観は存在するし、「純粹客観的な研究対象としての古典」観はそこから発展した。(ただし、英国軍司令官を「大衆」とは言い難い。「大衆」というより行動し、実践する人々と言い換える必要がある。「大衆」の概念規定は、すぐ後で再考する。)

「座右の銘の供給源としての古典」観から「純粹客観的な研究対象としての古典」観への発展の過程はシェイクスピア研究に限らない。自然科学でも、仮に自然を「古典」に見立てれば、そこから人生を生きる知恵を汲み取ろうとする「座右の銘の供給源としての古典」観に酷似した自然観が考えられる。これに基づく、占星術、航海術、軍事技術の要求があって、そこから「純粹客観的な研究対象としての古典」観に酷似した自然の原理を探求する自然科学が発展した。(ただし、自然科学は歴史的、地理的文脈を無視できる特徴がある。歴史的、地理的文脈を加味したイデオロギーとしての自然科学が最近になって唱えられている。それは科学史、科学技術社会論といった領域の話であって、自然科学や、その応用としての科学技術発展にとって、歴史的、地理的文脈は必須項目ではない。必須項目でないどころか、科学技術には歴史的、地理的文脈を無視するからこそ発展するという特徴もある。)

アメリカのシェイクスピア研究で特徴的なのは、「純粹客観的な研究対象としての古典」観に発展せず、古典から「座右の銘」的な教訓を汲み取ろうとする方向を精妙に発展させた傾向が強いことである。(それはアメリカが、その発展にとって歴史的、地理的文脈が必須項目ではない科学技術を中心に発展した国であるせいでもある。)

このことが単にシェイクスピア研究に留まっていれば、それはそれだけのことである。ところが、それが世界の運命に関わることになる。そこが、シェイクスピア研究という一歩現実から離れているはずのものが、意外にも深刻で今日的な問題と接点を持つことになることなのだ。



「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

仮にイラクや日本といった歴史ある国を軍事的に攻撃することを考えてみよう。

まず日本を英米が攻撃することを考えよう。英国が十九世紀に日本の植民地化を視野に検討し、伊能忠敬の地図を見て、植民地化が出来るような国ではなく、対等に扱うべき国だと認識し、断念したと伝えられる。アメリカは第二次世界大戦で検討だけでなく実行し、終戦間近に投降を呼びかけるビラには「夏草や兵どもが夢の跡」という芭蕉の句があったという。

つまり英米の軍事的攻撃には攻撃対象の国の研究が先立ち、それは地図から文学に及ぶ。それは対象国を一つの「古典」としてとらえ、その「古典」の読みが影響するといっているのはなかろうか。従って、そこには英米の「古典」観の違いが影響することになる。

アメリカは日本の民主化に成功したからイラクでも成功すると予想して開戦に踏み切ったのに失敗したと意識する。それは「座右の銘の供給源としての古典」観である。戦争をしかけて、日本を戦前の「忠君愛国」という座右の銘がある国から「主権在民」という座右の銘のある国に変化させた。同じくイラクに戦争をしかけ、「アラーの神の思し召し」という座右の銘のある国を「主権在民」という座右の銘のある国に変化させようとしたものの、イラクはそのまま「アラーの神の思し召し」という座右の銘のある国に留まり、「主権在民」は座右の銘として根付かなかったことになる。

「純粹客観的な研究対象としての古典」観で日本やイラクという「古典」を読み解けば、日本には軍部の独走と平行して、大正デモクラシーを経て、すでに成熟した民主主義が育ちつつあったのに、イラクにはそれがなかったことが分かるであろう。アメリカは多くの人命を失い、戦費を払っても、「純粹客観的な研究対象としての古典」観を避け、「座右の銘の供給源としての古典」観に賭けたとしか思えない。英国は義理でアメリカに付き合っているものの、もし英国が主体的にするなら、イラク戦争はなかったと思われる。では、どうしてアメリカはベトナムに続いて同じような失敗を繰り返すのであろうか。

その理由はアメリカが、先述のような、そこから人生を生きる知恵を汲み取ろうとする「座右の銘の供給源としての古典」観に酷似した自然観に支えられ、占星術、航海術、軍事技術の要求がいまなお沸騰し続ける、実用、実践重視の国だからではなかろうか。

さらには、歴史的、地理的文脈を無視するからこそ発展するという特徴もある科学技術の発展が国是であるから、ハイテク兵器の発展のために歴史的、地理的文脈を無視して攻撃に踏み切ったともいえるのではなかろうか。

そのことに深く関るのがシェイクスピア＝ベーコン説である。

先述の『『データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証する その一』<sup>16)</sup>の冒頭で「米国のシェイクスピア研究は決してシェイクスピア

---

16) 富山大学人文学部紀要第44号 (2006).

＝ベーコン説を支持するわけではないにせよ、万が一シェイクスピア＝ベーコン説が動かしがたい証拠によって証明されたら、英国や日本の研究者は衝撃を受けるであろう。しかしアメリカの研究者は『それも有りうること』と平然としているのではなからうか。」と書いた。

シェイクスピア＝ベーコン説や、昨今注目されるシェイクスピア＝ヴィア説などについて、「純粋客観的な研究対象としての古典」観では、これらは文字通りの説としては一笑に付すべきものながら、それぞれの作品間の影響関係に考慮すべき点はあるという態度になる。本稿もその立場に立つ。歴史的、地理的文脈を無視しなければ、当然の帰結である。

ところが米国学位論文「シェイクスピア作品に見出される普遍性」<sup>17)</sup>では問題劇やシェイクスピア＝ベーコン説、シェイクスピア＝ヴィア説などを、はっきりことわった上で避ける。これは奇異の観を免れない。

もし、英国のしかるべき大学でこの論文が書かれるなら、まず問題劇をさておいて「シェイクスピアの普遍性」を論議することは出来ないと言指導され、シェイクスピア＝ベーコン説、シェイクスピア＝ヴィア説は、取り上げるなら本格的に取り上げるか、取り上げないのなら全く言及すべきではないと言指導されるであろう。

「はっきりことわった上で避ける」というのは、出来れば言及したくないのに、「シェイクスピアの普遍性」を語る上で言及せざるを得ないということである。裏返せばアメリカではそれだけシェイクスピア＝ベーコン説、シェイクスピア＝ヴィア説からの圧力が強いことになる。

その理由は「座右の銘の供給源としての古典」観にある。言い換えれば歴史的、地理的文脈を無視するからこそ発展するという科学技術を視野に入れ、歴史的、地理的文脈を無視する古典観にある。

この論考のいう「シェイクスピアの普遍性」とは「座右の銘の供給源としての古典＝シェイクスピア作品」の「普遍性」なのだ。だから「座右の銘の供給源としての古典」の概念から外れ、その概念を検討する展開を見せる問題劇は、それゆえに、ことわった上で論考の対象外になる。（「純粋客観的な研究対象としての古典」観では、それゆえにこそ盛んに問題にするのに。）

また「純粋客観的な研究対象としての古典」観では、少なくとも、さほど情熱を込めて語るほどの重要問題にはならないシェイクスピア＝ベーコン説、シェイクスピア＝ヴィア説は、「座右の銘の供給源としての古典」観によって重要問題となる。

「座右の銘」の作者は、人生を生きる糧の供給者ゆえに、キリスト、仏陀、孔子などと並んで信仰の対象になる。シェイクスピアも信仰の対象になる現象があった。「純粋客観的な研究対象としての古典」観では、そうした現象が「シェイクスピア・カルト」として十九世紀以降盛んになり、やがて英国からアメリカに受け継がれたと冷静に分析する。

---

17) Remillard, Gerard J., *Universality found in William Shakespeare's works.*(2003).CR||291||

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

一方、そうした冷静、客観的に突き放した態度に飽きたらず、いくらか宗教味を帯びているものに惹かれる嗜好があって、「座右の銘の供給源としての古典＝シェイクスピア作品」の真の作者を求めてシェイクスピア＝ベーコン説、シェイクスピア＝ヴィア説を論じる傾向が存在する。その傾向は、歴史的、地理的文脈を無視したがることにもなる。信仰の対象は歴史的、地理的文脈から離れていた方が良いのだ。アメリカはその傾向が強く、だからイラク戦争に踏み切ったといえる。「その傾向」とは、信仰に力点があるのではなく、歴史的、地理的文脈無視の方に力点がある。

従ってイラク戦争を、よくいわれる一神教同士の対立と捉えることにはいささか疑念を呈したい。イスラム教とキリスト教の対立は十字軍の昔に遡る。その対立は歴史とともに展開してきていて、歴史的、地理的文脈を外す強力な存在がなければ、今日ほど激烈な様相にはならなかったかもしれないと思う。三千年の歴史的な文脈を無視し、アラブ支配下の土地という地理的文脈を無視し、アメリカはイスラエル建国を実現した。そして、歴史的地理的文脈を持つイラクという国家を攻撃し、泥沼状態にしてしまった。

それを可能にするのは、ハイテク兵器にいたる科学技術の進歩であり、繰り返し指摘するように、歴史的地理的文脈無視が科学技術発展の大きな要素なのだ。

キリスト教原理主義者の選挙での支持を念頭に、ブッシュ大統領はイスラム教原理主義者との戦いを始めたとし、イラク戦争の宗教戦的側面を指摘するむきがある。この側面は単にブッシュ大統領個人の選挙事情に留まらず、シェイクスピア研究で学位を請求するインテリ層にも似た傾向（「座右の銘」を愛し宗教味を帯びることを好む）があると指摘出来るのではなかろうか。

そのキリスト教原理主義についても、歴史的地理的文脈無視を指摘したい。というのは、キリスト教原理主義といえば、古代ローマの国教となり、東西にローマ帝国が分かれてローマ・カトリックとギリシャ正教に分離し、さらにローマ・カトリックに反抗してプロテスタントが形成した、「あのキリスト教」の一形態だと、つい思ってしまう。

しかし、「あのキリスト教」について、原理主義が台頭し支配的になる現象はヨーロッパでは起こっていない。あれだけの歴史を持つ宗教は、すでに何百年にわたって様々な過激派、原理主義が台頭し、血みどろの争いをしては消えてゆき、収まるところに収まって、少なくとも一国の首相や大統領を当選させるほどの力にはなりえないのだ。

現在、ブッシュ大統領再選に力を発揮したキリスト教原理主義は、現にアメリカを発展させている科学技術と市場経済そのものの申し子と考えた方が良いのではなかろうか。科学技術と市場経済による発展は、淵源に遡れば、ピルブルム・ファーザーズから発展し、働いて儲けることに神の恩寵の証を求めたプロテスタントのキリスト教信仰にゆきあたるのかもしれない。儲けはやがてチャリティーによって社会還元される。そのことはビル・ゲイツがマイクロソフ

ト社での儲けをチャリティーに還元している姿に影をとどめている。しかし、度々指摘するように歴史的地理的文脈無視の発展形態である以上、ピルグリム・ファーザーズの歴史とは、やや切り離されていると考えるべきではなかろうか。独占禁止法違反で会社の存続が出来なくならないために、チャリティーによる社会還元は現代の大企業が視野に入れるべき政策の一つであって、英米で大企業が社会的信用を得るための必須条件ともいえる。それは歴史の問題ではなく、あくまで現在の問題なのだ。

そのことを米国シェイクスピア研究学位論文で跡付けることが出来る。

『オセロ』を『ハムレット』などと並ぶ悲劇として論じる。ブラッドリーの問題意識にたちかえり、情念を低く見る見方に反論し、「三」の重視（3回繰り返す句が多用される）を言う論文<sup>18)</sup>がある。この論調に対しては、例えば愛は喜劇のテーマであるとしたベーコンに対し、シェイクスピアが『ロミオとジュリエット』『アントニーとクレオパトラ』で応えた、といった、エリザベス朝ロンドンの歴史的地理的文脈を踏まえた指摘は通用しそうになく、悲劇とは何かをアリストテレスやニーチェに立ち返って組み立てる論考になっている。

思索だけで時代を超え、旧世界の歴史の変遷を無視する「理系のような」発想の悲劇論といえる。こうした「普遍性感覚」は、ベーコン説に驚かぬアメリカの体質であり、歴史無視で哲学を手製で組み立てる傾向に、キリスト教原理主義を生む精神土壌がある証拠ともなるのではなかろうか。

米国学位論文「シェイクスピア作品に見出される普遍性」<sup>19)</sup>では「シェイクスピア喜劇には独立して闊達な女性が登場するからフェミニズムの立場にも配慮」といったフェミニズムがまさに噛み付きそうな表現もある。これもシェイクスピア＝ベーコン説、シェイクスピア＝ヴィア説と同様に、「シェイクスピアの普遍性」を語るからにはフェミニズムに言及せざるを得ない圧力がアメリカにはあるのであろう。

一方で、これは現代中国ではフェミニズムによるシェイクスピア批判が根付かず、むしろシェイクスピア劇に登場する自立した女性に憧れる傾向があると先述した感覚の根拠になるシェイクスピア劇の要素である。「シェイクスピアの普遍性」を語るとき、アメリカの識者の一部の感覚と中国のシェイクスピアを受容する感覚が一致することは注目に値する。

考えてみればフェミニズムの立場とは「女性が差別される現実を打破しよう」という座右の銘があつての立場といえる。その意味で、そもそもフェミニズムは「座右の銘の供給源としての古典」観に立つといえる。そこから発展して「純粹客観的な研究対象としての古典」観を加

---

18) Marcus, Nancy Cain. *Shakespeare's tragic triads: A reading of "Othello"*, (2003). CR||291||1

19) Remillard, Gerard J., *Universality found in William Shakespeare's works.*(2003).CR||291||1.

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベアコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

味するものもある。しかし「シェイクスピア作品に見出される普遍性」<sup>20)</sup>は、その入り口のところ而言及したに過ぎないので、このことから、この論考がいう「シェイクスピアの普遍性」とは「座右の銘の供給源としての古典」観に立つ「普遍性」なのだ。

以上のように「座右の銘の供給源としての古典」観と「純粹客観的な研究対象としての古典」観を対立させて論じてきたことは、「無学な大衆」と「識者」の対立を想起させる。

しかし現在「無学な大衆」で片付けられる集団が存在すると考えること自体がいささか時代遅れであり、米国学位論文という、いやしくも学位を請求するための論文に対して、「座右の銘の供給源としての古典」観に立つから「無学な大衆」的傾向があるというのは、「無学」に「学位」という自己矛盾になる。

ここで「大衆」の概念規定再考を行えば、現代では「無学な大衆」と「識者」の対立ではなく「実践的な学問はしても体系だった伝統的な学問をしない大衆」と「伝統を踏まえ将来を見通した体系だった学問を修めた識者」の対立を考え、「座右の銘の供給源としての古典」観と「純粹客観的な研究対象としての古典」観をそれぞれに対応するものと考えるときではなかろうか。

先にオークランド紛争時の英国軍司令官を「大衆」と呼べるかという問題があった。それは昨今のコンピュータ技術革新に貢献し、世界の巨大マーケットで成功し、その後チャリティーに力を尽くすビル・ゲイツを「インテリ」と呼べるかという問題にもなる。「伝統を踏まえ将来を見通した体系だった学問を修めた識者」に対し、そうした学問とは無縁でもIT志向、グローバルなマーケット志向の現代世界では「実践的な学問はしても体系だった伝統的な学問をしない大衆」が力を持ち、IT技術などはもはや「伝統を踏まえ将来を見通した体系だった学問」ではないとは言えないほど精妙に体系化され伝統を持ち、それを修めて成功したビル・ゲイツのような人物は「大衆」とは呼べない程の見識を評価される事態になっている。

これを踏まえれば、「シェイクスピア作品に見出される普遍性」と題した論考<sup>21)</sup>が、多くの言語に訳され、世界で上演されるシェイクスピアは「普遍的」であるとするこの意味がはっきりする。つまりシェイクスピアは世界的な精神文化マーケットで需要がある「精神文化ビジネス」の商品価値が高いから「普遍的」と言っているのに等しい。

つまり「実践的な学問はしても体系だった伝統的な学問をしない大衆」とはビジネスマンと言い換えられ、「普遍的」とは「グローバルなビジネスが可能」と言い換えられる。「世界で流通」ということだけに価値を置く形で「シェイクスピアの普遍性」を語ることは、他のデータベース分類項目では不適切な面があるにせよ、本項目「(e) 語学的考察に近いもの」では、言語はまさに「流通すること」に意味があるので、ある程度説得力を持つ。

---

20) Remillard, Gerard J., *Universality found in William Shakespeare's works.*(2003).

21) Remillard, Gerard J., *Universality found in William Shakespeare's works.*(2003).

この考え方を補強するものとして、大英帝国の発展に焦点を絞り、『マルタ島のユダヤ人』『ベニスの商人』『オセロ』『嵐』などを題材に、文化交流を通じて英国のアイデンティティーが揺らぐさまを考察し、通貨、文化、言語の交流とナショナリズムの関係に迫る論考<sup>22)</sup>がある。

「無学な大衆」と「識者」の対立ではなく「実践的な学問はしても体系だった伝統的な学問をしない大衆」（その中の成功者は、もはや「大衆」とは呼べない）と「伝統を踏まえ将来を見通した体系だった学問を修めた識者」の対立を考えるべきという時代の趨勢をまず指摘しておきたい。

「シェイクスピア作品に見出される普遍性」と題した論考<sup>23)</sup>をめぐる議論はひとまず終了し、さらに、この趨勢が、シェイクスピアをどう発音するかという問題にも及んでいることを次に述べたい。

ギリシャ・ローマの古典のレトリックがシェイクスピアのソネットに反映されていることを言う論考<sup>24)</sup>がある。当たり前のことながら、ペドラ(岩)の上にペドロ(ピーター)に教会を建てさせるといったギリシャ語、聖書がらみの具体例と、シェイクスピアのソネットが比較されると、分かり易い解説になる。イギリス本国なら教養番組のシナリオになることが博士論文になることで、アメリカがイギリスと違い、古典・聖書の伝統からやや外れ、大衆化した知性を求める傾向がある証になる。(これは「2001.9.11テロ」以降、アメリカが臨床心理学ではなくキリスト教原理主義に「悩み相談」を乗り換える現象が明らかになったことと関係している。これについては分類項目「(2) そうはいいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴(c) 西欧文化全体と関わるもの」で詳述する。)

例えば『ソネット集』はギルグッドの見事な朗読が有名であった。

現代においてイギリス本国でシェイクスピアをやる劇団のメンバーがキングズ・イングリッシュの発音が出来ず、ブランク・ヴァースの韻律で語れない事態になれば、良き伝統が崩壊することへの憂慮の声が上がるであろう。

これが、三十年前なら、キングズ・イングリッシュ、ブランク・ヴァースから外れた英語でシェイクスピア上演がなされたら、そのようなものはシェイクスピア劇ではないと、もっと厳しく排撃されたであろう。その後の研究で、シェイクスピアが生きた当時の発音はキングズ・イングリッシュの発音より現在のアメリカ英語の発音に近いことも強調されるようになり、ロイヤル・シェイクスピア劇団がロンドンでやるシェイクスピア作品の公演でも、発音は従来ほど格調高いキングズ・イングリッシュの癖が鼻につくものではない。しかし、ブランク・ヴァース

22) Netzloff, Mark, *The Anxiety of Empire: Cultural Exchange and the Space of Nation, 1588-1625*, (1996).

23) Remillard, Gerard J., *Universality found in William Shakespeare's works*.(2003).CR||291||1.

24) Horton, Jean Iris, *Renaissance rhetoric: The pensive puns in Shakespeare's sonnets*, (2003).CR||291||1.

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

の訓練が消えたわけではない。一度ブランク・ヴァースの韻律が出来るようになってから、自然な英会話の流れに直して初めてシェイクスピア劇らしい台詞回しになる。シェイクスピアが生きた当時はシェイクスピア出身県のなまり（ウォーウィックシャーなまり）による、もっと韻律が前面に出た詩劇であったとの研究もなされている。しかし、韻律にこだわる限り、「伝統の積み上げ」重視の動きであることに変わりはないと考えられる。

「真にブランク・ヴァースが語れる最後の名優と言われたのがギルグッド」といった調子で語ることは、中流階級趣味や学術的気取りだろうか。これはシェイクスピアへの思慕の念の表明の一つの形として「伝統の積み上げ」重視の想いである。「純粹客観的な研究対象としての古典」観が冷静、客観的に突き放した態度を取るので冷たい印象を持たれる。そうした面が確かにある中で、抑制された、宗教味を帯びない「感情」といえる。あるいは、これが、いずれ「(f) 実際に演じることからの論考」の項目で論じることになる、歌舞伎などを含め、演劇の実践において「正統性の確立」といったことが問題になる源泉かもしれない。

それは「実践的な学問はしても体系だった伝統的な学問をしない大衆」と「伝統を踏まえ将来を見通した体系だった学問を修めた識者」の対立を考えれば、後者の立場である。

アメリカと英国の「テロ対策」についての異なる対応を見せつけられ、イラクに攻め込むか、イスラムとの和解に配慮するかの違いを考えると、英国の「伝統重視」を、必ずしも保守的として退けるばかりではなく、再評価すべき面があることを認識させられるのが「テロ対策」である。

次に「座右の銘の供給源としての古典」観の検討の一つとして「シェイクスピアの有名な文句」について考察したい。

シェイクスピアの語学的考察を可能にする「普遍性」のもう一つの側面にもなる。「シェイクスピアの有名な文句」は、ただし、大量生産の品が手作りの品の微妙なニュアンスを無視してグローバルなマーケットを獲得する「普遍性」があることに似たことが「シェイクスピアの有名な文句」についていえる。

つまり、そうした文句は英国や日本の「純粹客観的な研究対象としての古典」観に基づく歴史的地理的文脈を外さないシェイクスピア認識と、アメリカと中国の、できれば歴史的地理的文脈を外して「座右の銘の供給源としての古典」観に基づく、人生の知恵を汲み取りたい要求に基づくシェイクスピア認識の違いを示してくれる。英国と日本は手作りの微妙なニュアンスを残すシェイクスピア認識で、アメリカと中国は大量生産の荒っぽさがあるシェイクスピア認識になる。そして、その荒っぽい方をベーコンが支援する構図になっている。

例えば、ハムレットの「生か死か（このままでいるか、いないか）、それが問題だ」で始まる有名な独白は、父の敵討を決行すべきかどうかで悩む文脈の中で、撃って出て運命と刺し違えるのはいいにしても、ふと死を想うとためらうとして、死への恐れを語り、あの世への旅人

は二度と戻って来ないといった告白が続く。

これはほぼ同時期に『随想録』を残したモンテーニュの「穏かな懐疑主義」に似ているといわれ、いわゆる通説もそれを支持する。

ではベーコンはどうだろうか。ベーコンにも「死について」と題するエッセイがある。その書き出しを少し引用してみよう。(ESP版からの拙訳。以下同様。)

人は死を恐れる、子供が暗がりを恐れるように。子供のそうした自然な恐れが物語を聞かされることで助長されるように、人々の死への恐れも助長される。確かに死を罪の報いとし、あの世へ行く過程とし、死について黙考することは尊く宗教的である。しかし自然への貢ぎ物としての死への恐れは人を弱くさせる。さらに宗教的な黙考では、しばしば虚栄と迷信の入り混じりがある。

「科学者」ベーコンらしい、現代人も説得できる正確な文章である。あたかもハムレットの独白を、独自の正確さで評価し、評論したのとも見える。さらに以下のくだりがある。

復讐は死に勝利し、愛は死をものともせず、名誉は死にあこがれ、悲しみは死につきまとい、恐れは死を満たし、オットー皇帝が自殺して以来、同情（感情の中でももっともやさしいもの）は、ただ元首への共感から真の追従者として沢山の殉死を生む。

このエッセイの最後は「死は良き名声への扉を開き、嫉妬を消滅させる」ということである。これだけ死についてのベーコンによる考察が並ぶと、シェイクスピアの作品との関連は数多く指摘できる。「愛は死をものともせず」は『ロミオとジュリエット』の結末、「復讐は死に勝利し」「名誉は死にあこがれ」は『ジュリアス・シーザー』を始め一連のローマ劇で数多く語られ、「同情（感情の中でももっともやさしいもの）」は『マクベス』の独白に出てきて、ブレイクの絵にもなった「同情」の擬人化を想わせる。「死は良き名声への扉を開き、嫉妬を消滅させる」はまさにシーザーの最期である。

ベーコンのこのエッセイにシーザーも登場し、ラテン語も多用して古典の教養の片鱗が見え、ベーコンの学識を伺わせる。全体として、後世のシェイクスピア学者が、現代的で公正な科学的知識と、ラテン語による古典の教養を加味して行った「シェイクスピア作品論」の趣きがある。しかし、それはベーコンとシェイクスピアの著述がすべて出揃ったものを鳥瞰出来る後世の感覚であって、事実は逆であろう。シェイクスピアの方がベーコンの著述を参考に戯曲を展開した。ベーコンの方が古典の教養も本物で実務に携わるものの静かな迫力と凝縮した知性がある。シェイクスピアは一般庶民の感情を込めた感覚をベーコンが書いた主題に盛り込んだの



「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

ではなかろうか。

つまり、ハムレットの独白は、キリスト教を信じようとしてなお死後の世界について懐疑を払拭出来ない姿勢がある。それはモンテーニュに似た、一種「おずおずした態度」なのだ。ベーコンのような「宗教的な黙考では、しばしば虚栄と迷信の入り混じりがある」として憚らない態度ではない。ましてや死について十分考察した上で「死への恐れは人を弱くさせる」と断じる態度ではない。「死への恐れが我々を臆病者にする」とは、まさに問題の独白中のハムレットの文句で、シェイクスピア=ベーコン説の「証拠」とも見えるものなのだが、ハムレットが信仰と懐疑に揺れ動く「おずおずした態度」で言うのと、ベーコンが「科学者」として「断定する」のとでは、印象がまるで違う。

この微妙なニュアンスをすっ飛ばすのが「座右の銘の供給源としての古典」観であり、十分考慮するのが「純粹客観的な研究対象としての古典」観である。

そもそも「座右の銘」を「おずおずした態度」で言うことがあるだろうか。「死を恐れ、死についてはおずおずと語るべし」という座右の銘があれば、内容は「おずおず」でも、座右の銘自体は自信を持って声高に語らねば座右の銘の体をなさない。

これを念頭にハムレットの「生か死か（このままでいるか、いないか）、それが問題だ」で始まる有名な独白がモンテーニュとベーコンと、どちらと関わりが深いか考えてみよう。

モンテーニュは人生に目的があることはすばらしいことだといった調子で語る。これも座右の姪になりそうな思考態度だ。モンテーニュの場合、たまたま市長といった役職に就くこともあったものの、「人生がままならぬ庶民」と「国家を担うエリート」の違いをいうなら、庶民に近い立場であった。ベーコンは間違っても「人生に目的があることはすばらしいことだ」とは言いそうにない。「帝国について」というエッセイなどは理想の国家像を真剣に追求する。その中で人生の目的追求とその価値が示される。生い立ちから晩年まで、常にイギリスという国家を担うべく運命づけられていて、むしろ人生に目的がない状態を楽しめるものなら楽しみたいくらいであったかもしれない。そうしたことを考える暇もなく、まっしぐらにイギリス国家のために奮闘した。

シェイクスピア自身はもちろんこうした観点からはモンテーニュに近かった。庶民の感覚を代弁する。ただし、作劇のきっかけに明らかにベーコンのエッセイを利用したのではないか。人生がままならず、ときに人生の目標を失いがちな庶民の「おずおずした態度」の台詞を、国家を担う設定のハムレットの台詞にまで書き込んだ。一方、もちろん戯曲制作に夢中であった天才としての人生を過ごしたという意味では、シェイクスピア自身が人生の目的を失うことはあまりなかったであろう。けれど、目標を失い悩める登場人物を描き続けたことも確かだ。

庶民の代表シェイクスピア、英国の知性の代表ベーコンといった図式は概ね当てはまる。しかしベーコン自身ギリシャ・ローマの古典と聖書に集中する伝統的な学問に反発し、市井の職

人と連帯して科学革命の先駆けとなったことは留意する必要がある。

こうした事情を、先に現代中国のシェイクスピア受容を説明するために引用した論考『唯物論者シェイクスピアと現代中国』は「実験を行う哲学者であるベーコンは実際的な経験から知識を引き出し、神学者や、モンテーニュのような懐疑主義者に信をおかず、同時代の人文的教養に疑念を抱いていた」<sup>25)</sup>と正確に記述している。

中国のシェイクスピア学者が、こうした点に敏感で正確な知識を持つのは、科学技術と市場経済で発展を続ける上に、権力闘争が逮捕、監禁、処刑といった実力行使を伴って学者、文化人の身辺にあるからだと思う。

アメリカは一応言論の自由が確保されているように見える。しかし、「2001.9.11テロ」以降、イスラム過激派との疑いをかけられた場合の人権無視は恐ろしいものがある。イスラム過激派を擁護する発言がアメリカ国内で許される状況にあるとは思えない。同時に科学技術の発展によって広島、長崎に原爆を投下し、二度にわたってイラクをハイテク兵器で攻撃する国の、科学技術と政治権力が結びついた権力闘争には熾烈なものがある。

このことを言い換えれば、中国もアメリカも、シェイクスピア作品を文学として読み、その微妙なニュアンスを読み取るよりは、シェイクスピアが作品を書いた時代そのもの、特にその科学技術の発展と、言論の自由が確保されない中での熾烈な現実の権力闘争に敏感な状況にあるということになる。

シェイクスピア＝ベーコン説が行われる実態は、ベーコンのエッセイなどをシェイクスピアが大いに利用したせいであって、ただし作品自体がベーコンのものではないと言えるのは「おぞおぞした態度」という微妙なニュアンスによる。そもそもベーコンほどの国家を担う覚悟に生きる超インテリでない限り、人は何かしら「おぞおぞした」面があり、だからこそ「座右の銘」を必要としているといえる。これは「伝統を踏まえ将来を見通した体系だった学問を修めた識者」側に立ち「純粋客観的な研究対象としての古典」観に立つ結論である。しかし、アメリカのように「実践的な学問はしても体系だった伝統的な学問をしない大衆」の力が強く「座右の銘の供給源としての古典」観の傾向が強い世界では、微妙なニュアンスがすっとんでしまい、ベーコンとシェイクスピアの区別がつかなくなる。それが、シェイクスピア＝ベーコン説が横行する理由ではなからうか。

中国では、シェイクスピア＝ベーコン説が横行する状況にあるようには、少なくとも先の中国のシェイクスピア受容を説明した論考『唯物論者シェイクスピアと現代中国』を読む限り見て取れない。その理由は、いくら科学技術と市場経済が発展しても、シェイクスピアのオーサーシップを論じる多くの人々が現れるほど、まだ社会の英米化が進んでいないからではなからう

---

25) Yang, Lingui, *Materialist Shakespeare and modern China*, (2003), p.142. CR||291||1

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

か。その点では、すでに社会の深いところまで英米化が進んだ日本の方が、まだシェイクスピア=ベーコン説信者が多いように思われる。

ベーコンのエッセイもモンテーニュのエッセイも「伝統を踏まえ将来を見通した体系だった学問を修めた識者」が「座右の銘の供給源としての古典」としての作品を、初めから計画して書いたものである。それを、とにかく演劇に仕立てて多くの人々の共感を得ることで金儲けをしなければならない「ビジネスマン」でもあるシェイクスピアが、グローバルな商品価値を持つようにアレンジしたともいえる。

「座右の銘」としてこれらを考えれば、「人生に目的があるのはすばらしい。人生の目的を失い、死を想っても、死後の世界がどうなるかわからない（だから人生に目的を持つように願おう）」というモンテーニュの「座右の銘」と、「自然への貢ぎ物としての死への恐れは人を弱くさせる。さらに宗教的な黙考では、しばしば虚栄と迷信の入り混じりがある」というベーコンの「座右の銘」（というより鋭い指摘。内に「宗教味を警戒しよう」という「座右の銘」が込められている）を多くの観客の共感が得られるように配合してハムレットの台詞としたのではなかろうか。

モンテーニュは宗教に「懐疑」を抱き、ベーコンは明らかに普通の意味での宗教を批判する。「無神論を経て本当の信仰に至る」といった近・現代の「いわゆる科学者」に近い考え方になる。モンテーニュは宗教に敬虔な人々から反発を招き、ベーコンは宗教信者どころか一般の人々からも敬して遠ざけたいくなる批判精神の鋭さがある。シェイクスピアはベーコンの言う趣旨を「懐疑」の調子でハムレットにおずおず語らせることで、多くの人の共感を得たのではなかろうか。

『唯物論者シェイクスピアと現代中国』によればフェミニズムと並んでキリスト教の懐疑主義への共感も中国にはないようである。

その理由は、いささか大風呂敷になるものの、そもそも中国はいわゆる宗教的感性のない国なのではなかろうか。孔孟の思想はもちろんのこと、老子や道教を見渡しても、ユートピア感覚（『唯物論者シェイクスピアと現代中国』もユートピアにこだわり、「テリー・イーグルトンは未来の平等社会ユートピアにシェイクスピアはいないとするが、近代社会は続くのでシェイクスピアに未来はある」<sup>26)</sup>と自己の論考を概括する）がせいぜいのところで、常に現実感覚を失わず（ユートピアとは、常に現実を意識した夢ではないか）、全霊をあげて宗教的ヴィジョンに没頭する思想は育たないように思われる。それゆえに「座右の銘の供給源としての古典」観が徹底していて、中国文化とは「座右の銘の集大成」とでもいえる状況がある。「座右の銘の供給源としての古典」観とは、常に現実への対処であって、壮大な夢が控えているわけではない。これに対して「純粋客観的な研究対象としての古典」観は、意外にも壮大な夢が一方にあるから、逆に徹底した客観的態度を取れるという面がある。

---

26) Yang, Lingui, *Materialist Shakespeare and modern China*, (2003), ABSTRACT. CR||291||1

このように、中国がいわゆる宗教的感性のない国だとしたら、そうした中国文化を輸入して出発した日本で、なぜ宗教感覚が育ったかが不思議に思われる。ここで問うのは日本に宗教感覚が存在する根本的な理由ではなく、日本文化の伝統の中で、シェイクスピア受容を考えると、何ゆえ日本の識者が西欧のキリスト教懐疑主義をある程度深く理解できたかが不思議に思われるということである。それは日本にキリスト教が輸入され、帰依した英文学者が多かったからであろうか。確かに日本の英文学者にキリスト教徒は多い。しかし、そのことと日本文化へのシェイクスピア受容は、少なくとも小津次郎が英国の実証主義的シェイクスピア研究方法を持ち帰って以後、次元が違う問題になっていると思う。それ以前のキリスト教信者でシェイクスピア学者である人々も、信仰と文学研究は別だと考える人は多かったのではなかろうか。

そう考えると、本居宣長の「もののあはれ」という「座右の銘」が注目される。この『源氏物語』の主題を「もののあはれ」として宗教感覚を断ち切った「銘」への、梅原猛からの批判は有名である。梅原は「宇治十帖で、式部は、当時最大のインテリである源信に挑戦したのではないか」<sup>27)</sup>として、宗教感覚を加味した『源氏物語』の読みを展開する。そうすると西欧古典に親しんだ目には、どこか『源氏物語』がダンテの『神曲』に変貌し、愛欲の罪で地獄におちた人々の告白の日本版になったようにうつる。

そのことは、逆に「もののあはれ」という「銘」のせいで、作品を宗教とも政治とも別のものに隔離してくれた本居宣長の功績を際立たせる。我が国を代表する文学作品を政治とも宗教とも別のものにしてくれた結果、いつしか日本の文学研究の伝統の中に、あらゆる文学について政治や宗教とは一旦切り離して見る見方が育ったのではなかろうか。

同時に、梅原猛が『源氏物語』に源信の宗教を重ねて論じたことから、一旦切り離したものを、再びくっつけることも可能なことがわかる。(この問題は、実際には、そうした着脱可能の手軽な知的遊戯ではないことを、すぐ後で説明する。)梅原猛の『地獄の思想』はベストセラーになったこともあり、梅原に共感する日本人は多かった。ただし、「もののあはれ」という「銘」が廃れることはなかった。

このことから、日本のシェイクスピア学者が中国とは違って十分に作品中のキリスト教懐疑主義を受容できた理由と、さらに現在の日本の英米化の意味が推察できる。

シェイクスピア研究と『源氏物語』研究を比較すれば、本居宣長の「もののあはれ」の大切さがわかる。もし、「もののあはれ」という「銘」がなければ、『源氏物語』のモデルになったともいわれる藤原道長や、それを取り巻く政治環境が直接後世の読者の関心の的になり、源信の宗教がそのまま日本国の国教になっていれば、梅原の説が定説になっていたかもしれない。さらに源信の流れをくむ宗教と深く結びついた形で科学技術が発達し、宗教と科学の闘争状態

---

27) 梅原猛,『地獄の思想』,(1967),p.127.

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

があれば、政治、宗教、科学に『源氏物語』が翻弄されることになる。その宗教と科学の闘争を思想的に統括するインテリとして源信の功績が大きいと認知されれば、「紫式部＝源信」説が流布し、日本から分離独立し、科学技術で日本を凌ぐ国が現れ、そこで広く信じられるようになったかもしれない。

英国におけるシェイクスピアの環境と、シェイクスピア＝ベーコン説が世界中で絶えず、それを一笑に付すことがアメリカでは必ずしもなく、英国とは違う独特のシェイクスピア研究が発展する現状は、喩えていえば、そのようなものであった。ただし、『源氏物語』のテーマを「もののあはれ」と表現したように、シェイクスピア作品をひとことで言い表し、政治や宗教と分離させることを言った識者はいなかった。

むしろ政治や宗教に徹底的に翻弄されたアイルランド出身の識者がそれに近い役割を果たした。十八世紀の終わりにエドモンド・マローンが世界で最初の客観的なシェイクスピアのテキスト校訂を行った。度々言及した「純粋客観的な研究対象としての古典」観は、シェイクスピアについては、ここに始まったと言って良いであろう。

エドモンド・マローンはアイルランド出身の人権政治家エドモンド・バークと親交があった。またアイルランドのダブリンで旗を揚げたといえる、最初のシェイクスピア役者デイヴィッド・ギャリックとも親交があった。

エドモンド・バークはアイルランド出身者でありながら、イギリス本国の政界で活躍した。アメリカ独立戦争の収拾にあたり、アメリカ側のベンジャミン・フランクリンと連絡をとりあってパリ条約締結を果たし、植民地インドの統治にあたるイギリスの圧制の当事者を告発して裁判に持ち込む。アイルランド出身であること、カトリックとして大陸との内通を疑われることなどを、政敵にマイナス材料として利用され、度々差別的扱いを受けながら、最後には爵位を提供され、それを断るまでに英国政界の重鎮となった。

そのバークがエドモンド・マローンのシェイクスピア校訂を、黄金の業績と称え、自分の『フランス革命論』が真鍮に過ぎないと嘆いたことは有名である。

以上を踏まえ、本居宣長が『源氏物語』の主題として「もののあはれ」をとらえたことになぞらえ、「純粋客観的な」テキスト校訂を行ったマローンのために、シェイクスピア作品について「銘」を考えるとすれば、「宗教的、政治的差別（あるいは逆差別）からの救い」といったことになるのではなかろうか。そうした黄金の業績の結果、シェイクスピア作品は『源氏物語』と同じく、宗教色、政治色のない受け皿として四百年を生き延び、世界の古典として「普遍性」を獲得する。そして、まさに作品全体としての宗教色、政治色がない受け皿であるがゆえに、様々な宗教色、政治色を加味されて現代に至ることになる。それが「シェイクスピアの普遍性」の一面である。英国政府の配慮で、その複雑な人間理解にイスラム的な面もあることを、イスラムの識者が語り波紋を広げ、その論争が「シェイクスピア＝イスラム教徒説」にまで発

展するとすれば、シェイクスピアという無色の受け皿は、様々な色を加味されたあげく、ついには「テロ対策」の受け皿となったのである。

もし、日本語が英語ほど広く世界に浸透し、さらに『源氏物語』を記述した日本語が、もう少し現代日本語と近ければ、『源氏物語』も同様の「普遍性」を獲得した可能性がある。

ここで日本のシェイクスピア学者が中国とは違って十分に作品中のキリスト教懐疑主義を受容できた理由を考えてみよう。それは、『源氏物語』を「文学」として読む伝統が確立していたからではなかろうか。登場人物の心の葛藤を、物語の記述のままに受け止め、宗教的、政治的解釈をせずに、しかも深く受け止める伝統が確立していたからだと思う。それが近・現代文学にも応用され、日本文学を豊かにするという発想で始まった外国文学研究にも及んだのではなかろうか。

本居宣長の「もののあはれ」という「銘」によって、『源氏物語』と宗教や政治が切り離されたといっても、原作に宗教性、政治性がないわけではない。むしろ、体制を揺るがす危険性を秘めた宗教性や政治性があるのが、すぐれた文学の通例である。「もののあはれ」は、一応その危険性を封印したとみせて、実際はテキストに変わりはないのだから、すぐれた読者であれば、ひそかに、その体制を揺るがす危険性を秘めた宗教性や政治性を読み取ってきたと考えられる。

「もののあはれ」という「銘」は、すぐれているからこそ毒もある文学を、国家が継承してゆくために、毒の部分を実封印するものであったのではなかろうか。

そうした伝統のある国の文学研究者が、坪内逍遙以来、様々な努力をしてシェイクスピア作品を原語で、また様々な形の日本語に訳しながら読むとき、キリスト教懐疑主義と、はっきり意識しなくても、ただ登場人物の心の葛藤を、記述のままに受け止め、宗教的、政治的解釈をせずに、しかも深く受け止める伝統に従って読んでいけば、名前を知らないままに人格を知るように、内容を読むことができたのだと思う。

梅原猛はちょうど七十年に大学紛争が勃発する直前『地獄の思想』を刊行した。国家がすぐれた文学を継承してゆくために、毒の部分を実封印する、その封印をわざわざ解いてみることをやってみせた。それが梅原の特性である。それは、日本を取り巻く環境と、その宗教性、政治性について、封印を解かないではいられない状況判断があったのだと思う。

その状況判断とは、国家体制の変革期に、「もののあはれ」という「銘」によって毒の部分を実封印された『源氏物語』が、体制による統治手段に墮してしまい、その枠内に留まる限り、人々の心に訴えかける力を失っていると判断したのだと思う。

マローンのシェイクスピアのテキスト校訂は、ただ出来るだけ正確にシェイクスピアが書いた形のシェイクスピア作品を認識する作業であって、毒の部分を実封印するとか、体制による統治手段にシェイクスピア作品を墮落させるといった作用は、一見ないように見える。

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

しかし、マローンのシェイクスピアのテキスト校訂によって、やがてシェイクスピアについての「正統性の確立」という、考えようによっては不思議な現象が起こることになる。シェイクスピアが国家的詩人として、歴代の桂冠詩人のさらに上に君臨する詩人の中の詩人の地位を得て、演劇ならではの様式の確立という現象が起こるのである。これがシェイクスピア・カルトと呼ばれる現象に違いはないものの、シェイクスピアについての「正統性の確立」全体を「カルト」と片付けるわけにはゆかない。

これはキリスト教と聖書の校訂を見れば分かる。キリスト教も、あるいは中東の一地域の「カルト」に過ぎなかったのかもしれない。それが次第に力を増し、ローマ帝国の国教となる。それだけのことなら、栄枯盛衰の理に従って衰退もありえた。ところが同時並行的に聖書の正確な校訂作業が何世紀にもわたって行われ、それに付随して印刷術、天文学、それに続く様々な近代科学の発展があった。同時にキリスト教について正統とされる宗派とそうでない宗派が分けられることになる。

同じくシェイクスピアも十六世紀末から十七世紀初頭にかけて、小器用な演劇人が一人現れ（シェイクスピアをまずそのように捉え、小器用な演劇人がどう詩聖に祭り上げられてゆくかを捉えてみる）、当時の先端的な知性と庶民感覚を配合させた演劇作品を生み出した。それは一世を風靡したものの、清教徒革命によって葬り去られる運命にあったかもしれない。王政復古期に、その時代にあった改作によってシェイクスピアは復活する。しかし、それだけなら時代の好みによって、また廃れる可能性もあった。マローンに始まるテキストの校訂によって、純粋客観的な研究対象としてのシェイクスピアが確立してゆく。それに、必ずしも付随したわけではないにせよ、大英帝国の発展に伴う様々な文化と、七つの海を支配する統治技術の発展と衰退があった。その中で、大英帝国の国家的詩人シェイクスピアについての「正統性の確立」という現象が起きた。

これに対して、梅原猛が源信の宗教をつきつけて「もののあはれ」の封印を解き、『源氏物語』を変貌させ、隠れていた力を引き出したのと似た作用を、シェイクスピア=ベーコン説は果たすことになる。これについてはすぐに説明するとして、先に現在の日本の英米化の意味を推察しておこう。

梅原猛が主張したことは、『源氏物語』の愛欲が宗教性をおびるほどのものであったということである。その点を半ば封印していた「もののあはれ」の概念を批判したことの方に、あるいは、七十年代の若い読者は関心があったかもしれない。しかし、当時の若者が、実態として宗教が持つ破壊力を認識していたかどうかは怪しい面がある。宗教の持つ破壊力を認識した梅原の文章力に圧倒されて想像したのみという面があった。現在の若者の方が、「2001.9.11テロ」を経験し、それに続いてアメリカがアフガニスタンとイラクを攻撃したこと、それを主導したブッシュ大統領がアメリカ国内のキリスト教原理主義勢力に支えら

れて再選を果たしたことなどを突きつけられ、嫌でも宗教の破壊力を認識させられている。

七十年代にはまだ日本ではお見合い結婚が主流であった。現在では恋愛結婚が主流になっている。英米で当然視されるものが従来の日本人にとって理解しにくかったもの、つまり「自由恋愛と宗教の力」は当時の英米理解における壁であった。その壁が破れてしまっている。

さらに国際化の掛け声の下、実際にその力が伸びたかどうかはともかく、英語を学ぶ環境は、少なくとも好むと好まざるとに関らず英米に注目せざるを得ないという意味でなら整っている。

日本社会の英米化といえば社会の構成員が別のものに変質したような響きがある。若者を中心にした現代の日本社会の英米化は、そうではなく、愛欲と宗教について英米と同じ認識に達したということではなからうか。それは本居宣長の「もののあはれ」という「銘」によって封印した『源氏物語』の宗教性を梅原猛が強調したことは、決して着脱可能の手軽な知的遊戯ではなく、『源氏物語』で描かれたものの実態が変質したわけでもなく、もともとあるものの認識の力点の置き方の違いに過ぎないことと同様である。

この梅原による「紫式部＝源信」説（紫式部が源信と同一人物だという意味ではなく、紫式部が源信の強烈な影響を受けたという説）が本居宣長の「もののあはれ」という封印を解いたということと、英国におけるシェイクスピアの「正当性の確立」に対してシェイクスピア＝ベーコン説（これもシェイクスピア作品の作者がベーコンだというより、そう推論したくなる程シェイクスピアがベーコンの強烈な影響を受けたと解した方が考察の意味が広がる）が突きつけたものとの類似は意外なほど大きい。

つまり、源信、法然、親鸞とつづく浄土宗、浄土真宗の系譜で、日本の主要な仏教宗派のうち浄土真宗がいわゆる原理主義的なグループを持ち、親鸞が明治にならなければ皇室から大師号を贈られなかったように、多少反体制的な側面を持つことである。

アメリカは、その存在そのものが英国にとっての反体制であり、ピルグリム・ファーザーズを出発点として現在キリスト教原理主義という西欧にはないものを出現させ、シェイクスピア＝ベーコン説を、許容しかねない、独特のシェイクスピア研究を展開している。

もし浄土真宗の原理主義的なグループが日本を脱出してどこかの地に独立国家をつくったとしよう。そこに、日本人国家であることのアイデンティティーを失わないために『源氏物語』を携えて行ったとしよう。そこでは梅原猛の『地獄の思想』にあるような「紫式部＝源信」（紫式部が源信の強烈な影響を受けた）説を許容しかねない、独特の『源氏物語』研究が展開されたかもしれない。

こうした考察が、梅原の意図を読み取りシェイクスピア＝ベーコン説になぞらえる上で荒唐無稽でない根拠を一つ挙げれば、「反時代的密語」という梅原猛が書いた2005年3月29日付け朝日新聞の文化欄コラムによると、市川猿之助が『地獄の思想』を読んで作者である梅



「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

原猛に接触を求めた事実と、猿之助がシェイクスピア＝ベーコン説の信奉者であることを梅原は紹介し、シェイクスピア＝ベーコン説が絶えない理由として、シェイクスピアとベーコンの二人が同時代を生きたと、「シェイクスピアのセリフに人生の機微をえぐった哲学的セリフが多くちりばめられていること」を挙げている。

「哲学的セリフのちりばめ」だけではシェイクスピア＝ベーコン説の根拠にはならない。梅原が「宇治十帖で、式部は、当時最大のインテリである源信に挑戦したのではないか」と書いたことになぞらえて例えば『ロミオとジュリエット』『アントニーとクレオパトラ』などで恋愛を悲劇の主題とすることにより、シェイクスピアは、恋愛は喜劇の主題とした当時最大のインテリであるベーコンに挑戦したのではないか」といった書き方をして、ベーコンのシェイクスピアへの影響を強調する方が、説得力があるように思われる。

いずれにしろ、梅原も猿之助も、『源氏物語』、シェイクスピア作品、歌舞伎という、いわば「正統性の確立」があるものについて、人間性の内奥に深く迫り、業の深さを描き出す作品の深さを極めれば、「正統性の確立」が封印したものに気づき、「正統性」への疑問を呈さないではいられないということではなかろうか。

マローンに始まるシェイクスピアのテキスト校訂は、シェイクスピアだけでなくエリザベス朝ジャコビアン朝全般に及ぶ書誌学研究になって発展してゆく。それは、現代ではコンピュータと関りを持つまでになる。

よくコンピュータを用いて、何とかという作品がシェイクスピアの作品であることが判明したという記事が新聞にのることがある。しかし、それは、コンピュータで分析できる、シェイクスピアの作品とされる著作に共通な、ある性質がその作品にも適用できることが証明されたことであるに過ぎない。厳密にはそれだけのことであってシェイクスピア＝ベーコン説を否定も肯定もしない。コンピュータはまだ「おずおずと語るか否か」を区別できないと思われる。つまり、歴史的地理的文脈や思想的文脈はおろか、単にまとまった会話ひとつの文脈さえコンピュータは無視してしまう面がある。しかし、それゆえに有用な機能もある。

岡本靖正はシェイクスピア時代の戯曲のト書きを数多くコンピュータでデータベース化し、特徴を調べていた。そして弟子たちも動員した研究グループでピールにしかない特徴を『タイタス・アンドロニカス』の第一幕から拾い出し、国際シェイクスピア学会で発表して評価されたことがあった。この第一幕の文体だけピールのものというネイティヴ感覚を裏付けたのだ。

ネイティヴ感覚といっても一般のネイティヴではない。「第一幕の文体だけピールのものというネイティヴ感覚」に至るには、広範な知識と感情体験が必要になる。あくまで、そうした高度の「人間の感覚」の補助手段としてコンピュータが有効活用されたということだと思ふ。

「純粹客観的な研究対象としての古典」観に到達することとコンピュータは直接結びつかない。文学研究の場合、広範な知識と感情体験の上にたった「純粹客観的な研究対象としての古典」

は、実用を目指して発展したコンピュータとはむしろ対極にある面がある。なぜなら「おずおずと語るか否か」を区別できず、シェイクスピア作品を、文学作品ではなく、「座右の銘」の集積物にしてしまう荒っぽい感覚こそがコンピュータを発達させるアメリカで主流だからだ。広範な知識と感情体験を経て育てられる文系のインテリを尊重せず、コンピュータ開発の潮流の中で、むしろ人間がコンピュータの感覚にあわせ、シェイクスピアとベーコンの区別がつかず、シェイクスピア研究と称しながらベーコン研究ではないかと思える論文も登場する。米国学位論文はそうした「荒っぽさ」の証拠になるように思われる。

ただし興味深いことに、実際にコンピュータを使ったシェイクスピア研究がなされるのは、むしろ英国や、先述した岡本のグループのような日本の一部である。つまり、アメリカではコンピュータは専ら軍事を含む政治、ビジネスの実践や解析をする経済方面が主で、シェイクスピア研究に応用されることは、それほど盛んではないように思われる。

その理由を「正統性の確立」に求めたら間違いであろうか。まず、岡本のグループのような研究を日本でやる場合、例えばシェイクスピア＝ベーコン説の証明のためには研究資金は得にくいと思われる。研究資金を引き出し、根気の入る入力作業をするには、どうしても「正統性の確立」という錦の御旗が必要なのである。

その事情を考察するためにキリスト教を例に考えてみよう。キリスト教の聖書研究でコンコードダンスを作るといったコンピュータが活躍する作業をするのは、概ね「正統性の確立」をした宗派ではなかろうか。そうでなければ、とてもそうした研究をするほどの資金が得られないという事情は、逆に、こうした事柄の「正統性の確立」とは何かということを考えさせられる。

キリスト教の場合は三位一体の承認といった「正統性の確立」の要件が比較的はっきりしている。では、それに反逆し、別の教義を奉じて「正統性の確立」から異端視される宗派が何とか寄付を集め、聖書に関する資料を集め、学者を動員し、コンピュータを用いて自己の教義を証明するような研究をしたらどうであろうか。それが成功して広範な支持を集めれば、ますます、その教義を奉じる宗教の勢力は拡大する。

そして「理論的には」「正統性の確立」の方向をひっくり返す可能性もあると思う。つまり、その勢力の方が「正当性の確立」をしたものと世に認めさせることである。ただし、そうなるに従来の「正統性の確立」をしたキリスト宗派を、今度は異端の地位に叩き落すことになる。それは例えばローマ・カトリック教会と英国教会を含む。この二つだけでも大変な勢力であって、それらを異端にしてしまうことは、まず「政治的に」不可能である。

このことを危うくなそうとしたことが実際に起こったのがニュートンの場合であった。ニュートンがひそかに三位一体を承認せず、アリウス派に近い信条を持っていたことは知られている。実際、原始キリスト教時代の素朴な環境では、三位一体ではなく、人間としてのキリストを独立させていた可能性は高いと思われる。どこかでキリストやその直弟子の系譜とは違

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

う「宗教官僚」的な人々の考えが入込まなければ、三位一体という概念は生まれない可能性は高い。ニュートンの知性をもってすれば、アリウス派的な考え方の「正統性」を証明するために資料を集め、弟子を動員して、誰にも文句を言わせないようなアリウス派的な教義を打ち立てることは可能であったと思われる。しかし、そうなれば、ローマ・カトリック教会と英国教会を含む西欧の巨大勢力との全面戦争になる。

ニュートンはこれを（おそらくは政治的判断の下に）封印し、後世のニュートン研究者も公にすることを憚ってきた。ニュートンの弟子でケンブリッジの講座を引き継いだ人物で、公に三位一体説を（おそらくはニュートンの本音にならって）否定したために、英国議会によって、その地位を奪われた人物が出たことが、こうした事情を雄弁に物語っている。

シェイクスピア研究の場合はキリスト教ほど何が「正統性の確立」をした研究で、何が異端の研究かがはっきりしない。シェイクスピアの「本場」である英国に限って言えば、シェイクスピア＝ベーコン説は異端である。しかしアメリカでは必ずしもそうではないのではないかと、ということが米国シェイクスピア研究学位論文から読み取れるというのが本稿を含む一連の論考で主張しているところである。

二十世紀で最も尊重されるシェイクスピアの伝記の一つにシェーンボーンの『ウィリアム・シェイクスピア：実証された伝記』<sup>28)</sup>がある。シェーンボーンはアメリカのシェイクスピア学会の会長で国際シェイクスピア学会の副会長をつとめた。それが「正統性の確立」をした研究であることを疑うわけにはゆかない。

しかしこのシェイクスピアの伝記としてすでに古典とっていい名著はシェイクスピア＝ベーコン説を否定しているだろうかと思って読んでみれば、決定的なことを何も書いていないことがわかる。シェイクスピアにまつわる伝説と史実との境界を、実証できる資料に基いて決めようとしたものではある。そこで浮かび上がるのはストラトフォードの田舎からロンドンに出て多少は成功したらしい演劇好きの男性の一生であって、英文学の古典の作者として確立したイメージとは違う。英国や日本の「正統性の確立」を奉じる価値観を持つ読者は、すぐにこの伝記の実証の上に英文学古典の作者として、そうした価値観を重ねて読む。けれど重ねて読まない読み方も出来るように工夫されている。

喩えていえば内部にアリウス派の勢力が強い宗教団体のトップが、「正統派」の看板を外したくないので、いかにも三位一体の教義を語るような著書であって、実際はアリウス派を刺激するようなことは何も書いていないような著書を書いたようなものといえるのではなかろうか。

こうして、くどいくらい「正統性」をめぐる議論をするのは、「テロ対策」との関連である。

---

28) Schoenbaum, Samuel. *William Shakespeare: A Documentary Life*. (Oxford:1975).

世界の包括的な価値基準として「正統性の確立」をめざすアメリカに対して、アメリカから見れば異端とみなす勢力がテロを含む手段で対抗し、「テロ対策」が世界的な問題になっているのが現在の状況である。

それがシェイクスピア研究の「正統性の確立」をした立場に立つか、あるいは異端とみなされても言うべきことを言うか、という問題で見て取れるのである。

上記シェーンボーンの伝記などは、「中立の立場で中東問題の平和解決に取り組む」という西欧向けの「正統性の確立」を装いながら、国内にユダヤ人口ビーの強力な勢力を抱えるために、イスラエルを刺激するようなことをほとんど何も言わないアメリカの各種の声明に似ているといえば、言い過ぎであろうか。

イスラエル支持者がシェイクスピア＝ベーコン支持者だという短絡は間違っている。しかし、資本主義経済下でビジネスでの成功をめざす「アメリカ的」な動きと、アメリカを中心にしたシェイクスピア＝ベーコン説への親近感は、英国紳士とその文化への対立概念としては、的外れではないと指摘できる。

よくサッチャー改革とは山高帽の紳士たちをシティの金融、株取引の現場から追い出したことだと言われる。その「改革の敵」であった山高帽の紳士たちこそが、まさにシェイクスピア＝ベーコン説を異端と断じて憚らないシェイクスピア研究における「正統性の確立」を奉じる文化を持つ人々なのである。

ただし、そうした改革を断行した動きを、アメリカ側から見れば、シェイクスピア研究における「正統性の確立」を奉じる文化を持つ人々を、ひそかにシェイクスピア＝ベーコン説に親近感を覚える人々が追い出したとうつつるかもしれない。

しかし、事実はそうではない。改革を断行したサッチャーにしても、決してアメリカ的な文化を導入したのではなく、シェイクスピア研究における「正統性の確立」を奉じる文化を持つ人々と同じ土壌に立っている。

これが「テロ対策」ではつきりするのではなかろうか。

アメリカはコンピュータを駆使した情報網があっても「2001.9.11テロ」を防げず、同じくコンピュータを駆使したハイテク兵器でイラクを叩いても、本当の意味で制圧出来ず、混乱の極に陥れてしまった。一方英国はロンドン地下鉄爆破同時多発テロでは、監視カメラ、DNAデータベースを始めとしたコンピュータを駆使した驚異的なスピード捜査で犯人を突き止めた。同時に精神的なイスラムとの融和を目指す行動を開始した

この電光石火の処置と融和政策はベーコンがエセックスの反乱の鎮圧と処刑に際してとった措置と、ベーコンのエッセイの中の宗教的な寛容と融和の精神を髣髴とさせる。まるで現在の英国の「テロ対策」の中心にフランシス・ベーコンがいるようだ。しかし、これが英国の伝統というものであって、広範な知識と感情体験の上にたった碩学にして行動の人を育て、そうし

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

た人材が国を統治する「人治主義」が英国なのだ。それはベーコンの時代よりもさらに大英帝国の発展と衰退を経験して磨かれている。アメリカが、イラクを制圧しようとするにしても、その方法が航空機とハイテク兵器による爆撃中心であるのと違って、大英帝国は地上軍で世界制覇し、地上軍を撤退させて植民地を手放した。その過程で、たとえばガンジーのような不服従無抵抗運動家を育て（ガンジーの法律家としての英国体験がその思想の下敷きになっている）、刃向かわせ、鎮圧しようとして失敗し、撤退を余儀なくさせられる経験もしている。その経験が英国流「人治主義」を鍛えた。

電光石火の犯罪捜査でコンピュータを使うことが英国で盛んなことは、こうした鍛え抜かれた「人治主義」の成果といえる。DNAデータベースによる犯罪捜査や監視カメラがアメリカより英国で発達している理由も、そこにあるのではなかろうか。公共の福祉と個人の人権のバランスの問題で、個人の権利を制限して公共の福祉を尊重する度合いが英国で大きいのは、その「人治主義」ゆえにこそといえる。

シェイクスピア＝ベーコン説を異端と断定して憚らない英国の「正統性の確立」の意味がここではっきりすると思われる。つまり、英国は伝統的にベーコンを「人」として捉えてきたのだ。

広範な知識と感情体験の上にたった碩学にして行動の人で真のインテリであるベーコンという「人」なのだ。シェイクスピアもまた広範な知識と感情体験の上にたった、碩学とまではいえないまでも、ある程度教養を積んだ行動の人で、大学は出ていなくて、あるいはインテリというには議論をして自己表現をすることに欠ける傾向があったものの、紛れもない才能を持つプロの演劇作家という「人」なのだ。この二人が同一人物ではあり得ない。

こうした「人」は教育によって育てられる。シェイクスピアは田舎のグラマー・スクールながらすぐれた教育者に恵まれ、ロンドンに出てもベーコンを含む高度なインテリグループと交わった確率が高い。ベーコンは大法官の子供として英才教育を受けた。

後に、演劇出身で演劇の訓練を一般的な教育に応用したバシュビーが創設したウェストミンスター・スクールを初めとして、パブリックスクールが建設され、そこからオックスフォード大学やケンブリッジ大学に進むエリート・コースが定まった。国として英才教育のシステムが確立したのだ。

山高帽の紳士たちをシティの金融や株式の現場から追い出したサッチャーは、決してアメリカ化をしたわけではない。一説には英国のエリート・コースを歩む男性が寮で厳しく躰けられる女性舎監にサッチャーが似ていて、エリート男性で占められた閣僚を統御できた結果サッチャー改革がなされたとも言われる。あくまで、そうした環境の中で英国の金融、株式の改革は行われ、「人治主義」によって経済改革が進行した。それはシェイクスピア研究における「正統性の確立」がなされる世界以外の何ものでもない。

広範な知識と感情体験の上にたった碩学にして行動の人で真のインテリだといっても、アメ

リカではそうした人を育てることも、そうした人に支配されることにもブレーキがかかる。むしろインターネットの発達で組織がフラットになることが歓迎されるように、一時的に権限を付与されたCEOに従っても、事業が失敗すれば責任を問い任務を外すことを想定した上でのことだ。コンピュータ開発は、誰もがチャンスを与えられ支配的な地位につけることに意欲を刺激されて進む。その反面人権意識は高く英国ほどDNAのデータベース化も監視カメラも普及しにくい。アメリカがハイテク兵器ではイラクを制圧仕切れなかったと同じく、アメリカ国内においても、多文化が混在し、人種の垣塙であるといった状況を、英国の「人治主義」程きめ細かく統治出来ていないともいえる。何とか統治が出来ているとしても、多文化、異人種間の融和がはかれるというより、それぞれに成功を目指して競わせ、勝ち組と負け組みを設定し、絶えず行動し、実践することを促し、マイノリティーの不満が爆発すれば、ときに軍隊を派遣して鎮圧する荒っぽい統治システムなのだ。ベーコンとシェイクスピアを、自信を持って区別出来る人材を育てないか、育ててもそのことに重きを置かず、区別出来ない認識に、むしろ人々が合わせているのがアメリカで、それがシェイクスピア研究学位論文に反映されている面があるのではなかろうか。

ベーコンもシェイクスピアも「人」として見るのではなく、その残した著作にのみ注目する。それも「おずおず語るか否か」までは注目しない荒っぽい読み取り方をする。そうすればシェイクスピア＝ベーコン説も真実味を帯びてくる。

ただし、こうしたアメリカの状況はベーコンその人と無関係ではない。シェイクスピアとベーコンが活躍した時代に英米は分離していなかった。「ベーコン自身ギリシャ・ローマの古典と聖書に集中する伝統的な学問に反発し、市井の職人と連帯して科学革命の先駆けとなった」と先述したように、ベーコンはアメリカに新天地を切り開く夢を見る人々がいる時代の空気を吸い、自身「ニュー・アトランティス」と名付けた理想郷を夢に見、科学技術立国の夢を育てていた。

つまりエリート・コースを歩んだ「人」に支配されるのではなく、「名もない人々」が活躍する国をめざしたのだ。シェイクスピアも、『ソネット集』で、自分を（『ソネット集』の「私」がシェイクスピア自身だと仮定すれば）美少年に比べ「名もない人」である点を強調する文句を記している。

ベーコンもシェイクスピアもともに「名もない人々」に親近感を示していたとすれば、英国式英才教育の中で「名をなした人」として二人を別個とする「正統性の確立」とは反対に、二人はシェイクスピア＝ベーコン説を許容するアメリカ文化に必ずしも反感を持たないかもしれない。

シェイクスピアが長詩を捧げ、一時期パトロンであったサウサンプトン伯爵が、アメリカの

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

ヴァージニアに興味を示したことを指摘する<sup>29)</sup>著名な英国の歴史学者がいる。この歴史学者自身が労働者階級の出身であることも偶然ではないかもしれない。

サウサンプトン伯爵はエセックス伯爵の反乱に連座して投獄の憂き目も味わい、年齢の若さに免じて釈放されている。エセックス自身は処刑され、その罪状の確立に、ベーコンがエリザベス女王から報酬をもらって取り組んだ。エセックスには一定の人気があって、その処刑には細心の注意が必要であったのだ。

エセックスは女王からアイルランド討伐軍司令官に任じられ、任務を果たせず、「イングラントに帰還すべきか否か、それが問題だ」と逡巡したあげく、女王の禁を破って帰還し、女王の私室に、文字通り土足で乱入した。

以上だけからいえば、エセックスをハムレットに、世知に長け、狡賢い面を見せたベーコンをポローニウスにして、これらをモデルにシェイクスピアが『ハムレット』を書き上げたと考えても不自然はない。

その当否はともかく、シェイクスピアが交わったインテリグループには、アメリカに関心を寄せ、エリザベス朝政府への批判的な空気がなくもなかったことが伺える。その批判的空気を革命的気分を読み直し、ハムレットを革命への逡巡と実行のイメージで捉えてドンキホーテと結びつけるのがロシア、中国など東側諸国の伝統であったことは先述した。

アメリカへの関心といえば、ビルグリム・ファーザーズの英国脱出とアメリカ建国という「神話」に関係がありそうなシェイクスピアの詩がある。

シェイクスピアのソネット116番の趣旨は「愛」をゆるがぬものとし、航海で頼りにされる北極星にたとえて、その高度は測れるけれど価値ははかり知れないといった表現になる。あらゆる障害を乗り越えて結実する真実の「愛」というテーマは、シェイクスピアの初期の喜劇ではストレートにテーマとなり、その後も基本的には変わらない。

ただし、この「愛」は、必ずしも男女の愛だけに限定されているとも感じられない。神の愛とは違う様相ながら、信念の強さを見れば信仰と無縁ともいえない。キリスト教がベースにあって、ローマ・カトリック教会が推奨する純潔の愛の精神を受け継ぎながら（星に喩えるので、聖母マリアの象徴であるスピカを連想し、そのような印象があるものの、解釈だけならプロテスタント、それもピューリタンでも構わない）、その支配を脱して海に乗り出すアングロ・サクソン人の冒険心も加味し、理想を求める若い恋人を祝福する感覚もある。北極星の高度を測る職人の技術と学問の結合をめざした科学者ベーコンを利用した表現でもある。

現代のアメリカはベーコンの夢が半ば実現しているともいえる。

広範な知識と感情体験を経て育てられるエリート、つまり山高帽の紳士が中心にいる伝統重

---

29) A.L.Rowse, *Shakespeare's Southampton: Patron of Virginia* (London: Macmillan, 1965).

視の英国と、伝統を破壊しても個人（といっても名もない人々）の自由を尊重する道を選んだ米国の違いがそこにある。米国では「チャンスの平等」を徹底する。米国では研究においても博士号取得者による「チャンスの平等」を徹底する。そのことがシェイクスピア＝ベーコン説と関係する。次にこのことを論じたい。

(f) 実際に演じることからの論考

後世に名を残す作品を著すには、「博士号」のないシェイクスピアでは駄目で、現在なら十分「博士号」に値するベーコンでないと駄目だという考え方が、いくら権威ある学会が否定してもシェイクスピア＝ベーコン説が、特にアメリカで絶えない一つの理由になる。

英国でも「無学な者があのような作品を残せるはずがない」という声はある。しかし、アメリカでは、もっと手が込んだ手続きを経て、そうした声が大きくなるのではなかろうか。

アメリカは、評価基準を決めて審査を行わなければ人物は評価されず、英国は、基準は曖昧なまま総合的に評価し、価値評価を人格でとらえる面がある。先述のように、広範な知識と感情体験の上にたった碩学にして行動の人を育て、そうした人材が国を統治する「人治主義」が英国なのだとしたら、基準に照らして行動を評価し、政治的取引を含む手続きによって意思決定を行って統治するのがアメリカになる。

これが「博士号」取得システムにも反映されている。

例えば高校の授業をいくら積み重ねても文学博士は献呈されないとの考え方が英国や日本では一般的ではなかろうか。

つまり「レベルの高い」大学での講義は、それが権威ある雑誌に収録されるなどして、積み重ねれば博士号の対象になっても、高校の授業の積み重ねでは、余程周到な理論的裏づけがあつての教育学博士ならともかく、文学博士は献呈されないという思想には、「大衆には理解できないレベル感覚」が前提にある。

問題の多い高校で非行を繰り返す生徒に古典文学の良さを教える方が教育の実践としては困難を克服したという意味で価値があるかもしれない。それは学術研究に貢献することとは別だという立場が一方にある。それが「別ではない」というのが米国の立場ではなかろうか。

それは「チャンスの平等」を徹底し、大衆にも博士号取得のチャンスを与えるシステムを構築することになる。そのことを念頭に、以下の米国シェイクスピア研究博士論文を考えてみよう。

『十二夜』を実際に演じてみて、ヴァイオラの両性具有の心理を考察したもの<sup>30)</sup>がある。チャー

---

30) Acosta, Gena, *An Acting Analysis of Viola in William Shakespeare's Twelfth Night*, (1995). MF||189||12



「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

ルトン・ヘストンへのインタビューも付録に収録し、クレオパトラの演じにくさなどについて考察したもの<sup>31)</sup>もある。

コロラド・シェイクスピア・フェスティバルの記録<sup>32)</sup>は、それで学位が取れるという点を含め、米国のボーダーレスでクリエイティブな実状を表している。実際の祭の雰囲気から演劇が生まれる感覚は十六世紀英国の実状に「似ている」ともいえるが、そこに「こだわる」わけではない。

『シンバリン』の舞台の変遷史を探求した論文<sup>33)</sup>がある。王政復古期にはセンセショナルな改定が行われ、ギャリックなどで成功し、その後アーヴィングとエレン・テリーのような名優で人物像が変化しつつ、時代によって寓話化したり実験劇化したりする過程を追う。

マクベスの演技について才能と技術の観点からスタニスラフスキーを援用しつつ、実際に演じた体験を元に独自の演技論を展開するもの<sup>34)</sup>もある。高校で演技を含めてシェイクスピアを教材とした実践的論考もある<sup>35)</sup>。

学会に新風を吹き込んだり、新たな視点を見出して他の研究者に刺激を与えるものとして、以上の論文の内容を評価できるかどうか疑問が残る。英国や日本などの旧世界の学会ではむずかしいかもしれない。とにかく学位取得のための形式として、大衆にもアカデミズムに門戸を開くシステムという見方が、これらの論文のありかたについて言える。

これを新世界と旧世界の違いといった大雑把な見方ではなく、シェイクスピア研究における「正統性の確立」という観点から、もう少し突っ込んだ議論をしてみよう。

なぜ、これらの論文では英国や日本では学位取得がむずかしいのか。

まず英国の場合シェイクスピア劇の実践ということでは、すでに確立した格付けが存在する。フリンジから始めウェストエンドの格の高い劇場へと舞台に立つ役者の評価は上がってゆく。最後には女王からサーの位を授けられる。一方学者の世界も格付けがあって、オックスフォード大学でシェイクスピアを講じる学者を最高位として、そこまでに学位を取った後様々な大学を経て次第に「出世」してゆく。ウェストエンドの格の高い劇場で演じられるシェイクスピア劇のパンフレットの解説は、大抵オックスフォード大学でシェイクスピアを講じる学者が担当している。さらに学者を中心とした国際シェイクスピア学会というものがある。そして俳優でその道を極めた、例えばサー・ジョン・ギルグッドともなれば、長年国際シェイクスピア学会の会長を務めた。世界のシェイクスピア学会の最高位に君臨したのだ。

---

31) Soughers, Leslie A, "Immortal Longings" *Voluntary Death in Antony and Cleopatra*, (1995). MF||189||13

32) Nichols, Lynn Wayne, *The evolution of the Colorado Shakespeare Festival*, (1992). 930.28||Sh||Ev

33) Barbara Louise Eaton, *Journey's End: A Theater History of Shakespeare's Cymbeline*, (1996). MF||194||17

34) Sturdevant, David Conaway, *The Fusion of Talent and Technique, An Actor's Approach to the Role of Macbeth*, (1997). MF||194||3

35) Rose, Liisa Marie, *Shakespeare in High School Drama: A Model for Active Learning*, (1996). MF||194||4

つまり英国で実践が軽視されるのではなく、実践を極めれば学会の最高位につくほどに重視されている。こうしたシステムの総体が「正統性の確立」と考えてもいいのではなかろうか。

だからこそ上記の米国シェイクスピア研究学位論文の実践記録で博士号授与というわけにはいかないのだ。素人がちょっとシェイクスピア劇に関った記録を書いて、それでどうして学位が取れるのかと英国なら不思議に思われるであろう。しかし、アメリカ側から見れば、そうした英国の価値基準が曖昧にうつる。つまり、何ゆえにFRINGEで演劇界に身を投じた若者が、次第に格の高い劇場の舞台に立つことを許され、最後には女王からサーの位を授けられるかの基準が、誰の目にも明らかというわけにはいかない。

だからといって、謎めいて内部だけが知るいかがわしい基準というわけでもない。全く名もない観客でも、シェイクスピアが好きで長年なけなしの小遣いはたいて劇場に通っただけでも、サー・ジョン・ギルグッドの価値は分かるという側面がある。

では、日本の場合はどうか。

英国のように能役者、歌舞伎役者で人間国宝になった人が、そのまま国文学会の会長になるわけではない。しかし、国文学研究のすぐれた業績をあげる人々と、古典芸能者の交流は従来からあったし、紫綬褒章、文化功労者、文化勲章といった国家から顕彰される制度は、英国と同じように、古典芸能界にも学会にも、ともに共有されている。これが、日本における能や歌舞伎の「正統性の確立」と考えてもよいであろう。学会も英米のように出版登録制度が早くからあって資料が一般に公開されているわけではないので、資料のある家に入りにくいならば研究もできない。能や歌舞伎について、研究と実践とが、そう離れることはありえない。

これで片付くなら古典芸能の研究と実践については、英国と日本は「レベルが高く」アメリカは「レベルが低い」で終わるところであった。

ここに文化勲章受章者梅原猛と、本人は歌舞伎の名門の御曹司として、人間国宝の道歩んでいたかもしれない市川猿之助という役者が、ともにシェイクスピア＝ベーコン説に好意を寄せ、スーパー歌舞伎なるものを創造した。ここで歌舞伎についての「正統性の確立」がゆらいでしまったように見える。

特に市川猿之助の持論である歌舞伎の門閥制度批判は、ちょうど英国のシェイクスピアについての「正統性の確立」とその顕彰制度に対するアメリカからの批判に似て、アメリカの実践の記録で学位が取れる制度を望むように、一見思わせる。

確かに歌舞伎の名門の御曹司に生まれたら「正統性の確立」が保障され、そうでなければ保障されないとすると、何やら謎めいて内部だけが知るいかがわしい基準に見える。スーパー歌舞伎とは別に、市川猿之助が他の「正統性の確立」がある役者とともに舞台を積み重ねたら、あるいは人間国宝への道もあったかもしれないとか、スーパー歌舞伎という同じグループで歌舞伎をやっている、市川猿之助など名門の血筋の役者だけが「正統性の確立」がある歌舞伎

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

の舞台業績として認知されるといった基準が提示されたら、いかにもインチキな基準に見える。

しかし、これも「全く名もない観客でも、シェイクスピアが好きで長年けなしの小遣いはたいて劇場に通っただけでも、サー・ジョン・ギルグッドの価値は分かる」という英国シェイクスピア劇の「正統性の確立」基準に似たところがある。ちょっとした台詞の言い方、わずかな所作で、長年歌舞伎を観た目には名門の血筋とそうでない役者の違いは分かるのだ。

それなら組織だった研修制度で名門の血筋が身に着けた台詞回しや所作を一般に公開すべきだという議論は当然あるし、ある程度実行もされている。かつては「お二階さん（名門の御曹司を補助する、歌舞伎役者というより半ば黒子的存在）を多く作るだけ」と悪口を言われた研修制度ではある。名門への養子縁組なしに、全くの素人を研修的な訓練だけで人間国宝に出来るかどうかは、未来の問題である。

演劇の「正統性の確立」基準は曖昧で、いずれスーパー歌舞伎が「正当性の確立」した歌舞伎の仲間入りをするのか、中村勘三郎のニューヨーク公演は「正統性の確立」した歌舞伎の仲間なのか、といった問題は、日本の家族制度（つまり「家」の圧力なしには芸の精進に励めない性質が歌舞伎にあるのか。義理人情という「家」の構成員間の情の表現が歌舞伎の芸の究極の目的なのか。それは役者だけでなく観客の問題でもあり、観客が義理人情に反応しなくなったら「正統性の確立」基準が変化するものなのか、といった問題がある）のあり方まで含んだ、複雑な問題である。

「正統性の確立」のある歌舞伎は、型にはまった演目と演技がつまらないと、歌舞伎の現状を批判する声はかなり大きい。しかし終戦直後から日本人の心の空虚を救ったといわれる六代目菊五郎の伝説の舞台や、七十年代に歌舞伎の名優たちがシェイクスピア劇を演じた記憶は、「正統性の確立」した演劇の凄さを強く思わせる。そう簡単に伝統的な歌舞伎を否定できない。

梅原猛が「正統性の確立」した歌舞伎を批判しながら文化勲章をもらうことは、そう矛盾とは思われない。論文の場合、例えば「もののあはれ」という「銘」が封印したものを暴いて源信の宗教との関連を指摘しても、「もののあはれ」に代表される「正統性の確立」した文学が、暴かれたものをあわせて豊かになるからである。梅原は、この『地獄の思想』から始まって、様々に「正統性の確立」した文化を調査し、民間伝承や文物の実施調査を武器に、その「正統性の確立」の陰に封印されたものを暴いてきた。そのすべてが、「正統性の確立」した日本文化の別の側面を提示することで、単に「正統性の確立」を確かめ継承していただければ考えられなかった程豊かなものになったとも解釈出来る。

しかしスーパー歌舞伎として演目になってしまうと「正統性の確立」した歌舞伎の持つある種の側面（例えば登場人物の複雑な性格描写）が失われた印象は否めない。

そして、改めて検討すべきは、梅原と猿之助の根深いシェイクスピア＝ベーコン説好みであると考え。再び「反時代的密語」という梅原猛が書いた2005年3月29日付け朝日新聞

の文化欄コラムを参照すると、市川猿之助は『地獄の思想』を読んで作者である梅原猛に接触を求め、互いに「天翔ける魂」を感じて意気投合したという。この意気投合の正体は何であろうか。このコラムでは、猿之助がシェイクスピア＝ベーコン説の信奉者だと書いてある。梅原自身がそうだと公言しているわけではない。役者が何を信奉しようと自由という面があっても、梅原は学者なので、軽々しく学説の支持不支持は表明できないのであろう。しかし、どう読んでも、このコラムはシェイクスピア＝ベーコン説支持（もしくは支持者へのある種の共感）を仄めかしているように感じられる。猿之助のアドヴァイスと主役引き受けによって実現した自作のスーパー歌舞伎に哲学的な台詞が盛り込まれているとして、「その意味ではスーパー歌舞伎の作者も、ベーコンのように偉大ではないにしても、哲学者であったわけである」とし、自分の作品が「二十世紀の代表的な歌舞伎の一つとして少なくとも百年、二百年は残るのではないかと思う」と言う。

なるほどスーパー歌舞伎の戯曲を含め梅原の著作の総体は百年、二百年にわたって受け継がれ再検討を繰り返される可能性があると思う。また市川猿之助が宙乗り代表される技で復活したものも、歌舞伎の伝統の継承の中で同様の価値を持つと思う。

しかしスーパー歌舞伎の台本と上演だけを切り離して、それがシェイクスピア作品と同じ何百年も継承される価値を持つかどうかについては、一方である種の疑念が残り、一方で希望もある。

疑念を先に述べれば、「正統性の確立」した歌舞伎の持つある種の側面（例えば登場人物の複雑な性格描写）が失われた印象がある上に、はっきり言って単純過ぎる（その単純さの意義を十分認識した上で、敢えて言わせていただければ）のだ。

しかし、おそらくはスーパー歌舞伎の作者、初演の主演者、そして信奉者たちは、そこにこそ今までになかった魅力があると反論するであろう。確かに、スーパー歌舞伎の持つ単純さには、後で詳述する「シェイクスピアの普遍性」に通じる要素がある。それが、スーパー歌舞伎が古典として残る希望なのだ。

この問題を突き詰めて考えれば、梅原、猿之助が意気投合したという「天翔ける魂」の正体が問題なのではなからうか。

それは、歌舞伎を超え、世界の運命に関する重要な問題を提起する。つまり、そこには「愚直」という要素が介在する。

それはデータベースの分類項目（2）そうはいいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴の(c)西欧文化全体と関わるものの中で触れることになるイラク戦争以後「アホでまぬけなアメリカ人・・・」<sup>36)</sup>といった論評が行われる本質にも関る。

---

36) Moore, Michael, *Stupid White Men ...and Other Sorry Excuses for the State of the Nation!*, (2001).

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

三島由紀夫は「愚直」ということを愛でて自衛隊に乱入し切腹して果てた。新作歌舞伎不作の時代に三島の歌舞伎だけが精彩を放ったのは、今にして思えば「切腹」の概念が頻出する作品で、そこに迫真性があったからではなかろうか。

ニューヨークの世界貿易センタービルに飛行機で突っ込む。その報復としてアフガニスタンやイラクを攻撃する、といった行為に「愚直」という側面がないとはいえない。背景はともかく、実行するぎりぎりのところで「愚直」という要素なしには起こりえない事象である。

三島の新作歌舞伎に「愚直」という要素がある迫真性があったとすれば、梅原、猿之助のスーパー歌舞伎にも同じ要素があり、それとシェイクスピア＝ベーコン説好みが連動していることを、次に述べたい。そこから「天翔ける魂」の正体を、本稿の立場なりに明らかにしたい。

そのために意外にもハーベイの血液循環説など「理系の理論」から「愚直」の本質が見て取れることを説明したい。

シェイクスピア作品がハーベイの血液循環説の影響を受けた（むしろ先取りした）ということとは、かなり動かぬ証拠があって主張できる。それは、『ハムレット』の設定として、ハムレットの父親である先王ハムレットが耳に毒薬をたらされ、その毒が全身に回って死んだということなどがあるからである。

これは、耳の穴に何かをたらせば、それが全身に回るといふ、血液循環の理論なしには考え付かない設定である。ハーベイがこの理論を著書にしたのは一六二八年になってからである。とはいえ、それまでにフランシス・ベーコンなどのインテリのグループメンバーには、こうした考え方が情報として伝わっていた可能性を否定できない。『ハムレット』が書かれたのは一六〇〇年～一六〇一年頃である。

シェイクスピア＝ベーコン説は、これを「動かぬ証拠」とする。シェイクスピア作とされる一連の作品は、ベーコンのようなインテリによって書かれたからこそ血液循環説を先取りできたのであって、シェイクスピアと称する無学かもしれない役者あがりの人物では、それは出来ないと断定するのだ。

この断定には偏見があるという見方も出来る。シェイクスピア＝ベーコン説には史実に存在するウィリアム・シェイクスピアという人物（ストラトフォードからロンドンに出た人物ということで「ストラトフォード人：英語ではStratfordian」と呼ばれる）を見下す方向と、そうではない方向があると思われる。梅原、猿之助の「天翔ける魂」の正体を考察するには、まず見下す方向をはっきりさせ、それとは違うシェイクスピア＝ベーコン説を浮き彫りにする必要があると思う。

まず「ストラトフォード人」シェイクスピアを見下す方向のシェイクスピア＝ベーコン説を確認しておこう。

血液循環の理論を決め手としてシェイクスピア＝ベーコン説を主張することは、「シェイク

スピアと称する無学かもしれない役者あがりの人物では『ハムレット』は書けない」という偏見に基づき、シェイクスピアに一種の反感を持って、あの世のシェイクスピアにむかって「お前は血液循環の理論を理解できないだろう」との疑いをかけ、一連の「シェイクスピア作品」はシェイクスピアではなく、血液循環の理論を理解できるようなインテリグループの一人の手になるものとする宣告を下すようなことに近いともいえる。そうしたエリート意識に基づく偏見は、エリートが非エリートを「見下す」というだけの要素を強調した見解になる。

しかし、おそらくこの見解に梅原、猿之助の「天翔ける魂」の正体があるわけではないと思う。梅原、猿之助のシェイクスピア＝ベーコン好みにはエリートが非エリートを「見下す」方向とはむしろ逆の、ある意味ではむしろ非エリートを応援することにもなる、「愚直」という要素が介在するように思われる。

ベーコンやハーベイにも「愚直」の要素がある。科学技術の発展には「ごまかしのない推論」「ごまかしのない実験」を「愚直」に積み上げるという必要がある。

ハーベイが血液循環説を発表する前に、その知識をインテリグループを介してベーコンが得ていたと一口に言う。その知識の共有は当時の西欧全体を精神的に支配していたローマ・カトリックの見解にも反するものであり、単なるプロテスタントの勢力ではなく、プロテスタントの国家として出発したイギリスが、国家の命運をかけて守らねばならぬ「愚直」な知識であった。

これは、まず「理工系の愚直さ」と概括すれば分かりやすいかもしれない。小柴昌俊が「カミオカンデ」によって宇宙線の動向を探りノーベル賞に至る経緯は、きわめて大雑把に真理のありかを直観し、後は様々な工夫をしながら「愚直」に突き進むことであった。その協力者たちも小柴の意気に感じて、採算や勝算を度外視して「愚直」に協力する。

梅原と猿之助が意気投合し、スーパー歌舞伎を創設した「天翔ける魂」の正体とは、そのようなものであったのではないか。梅原は「もののあはれ」を始めとして、いわゆる学会の定説、「正統性の確立」があるものに、民間伝承をつきとめ、実地検証で資料を集める地道な努力で挑戦していった。まさに小柴と同じきわめて大雑把に真理のありかを直観し、後は様々な工夫をしながら「愚直」に突き進む努力であった。

宙乗りの技を復活した猿之助も、従来の歌舞伎が忘れたものを取り戻すという「大雑把な真理のありかの直観」があつて、実際に宙乗りなどを自分でやってみるといふ地道な現場の努力によって「愚直」に突き進んで行った。

これを念頭に、シェイクスピア＝ベーコン説に対して、いわば「正統性の確立」がある側からの反論だと思われる見解を以下に述べてみよう。

「ハムレットの父親である先王ハムレットが耳に毒薬をたらされ、その毒が全身に回って死んだ」という場面は実話に基づく。それはゴンザーラという名前の医者が、ある公爵の耳に毒液をたらして殺したという実話があつたことで、その名前が、シェイクスピア作品では被害者

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

と加害者が入れ替わり「ゴンザーロ殺し」という劇中劇を王に見せて、王の罪を暴く事件に脚色された。

こうした操作は演劇人特有のものであって、とくに被害者と加害者の名前を入れ替えたり、一字違いの名前を創作するなどは、もしこれが舞台上の殺人事件ではなく、実際の殺人事件として捜査の対象になった場合、司直の側にたてば、まさに犯罪者のごまかしの手口に見えるのではなかろうか。法曹界の頂点をめざし、ローマ・カトリックを批判して英国独特の正直さを基本にすえた司法を確立しようと努力していたベーコンがやりそうなことではない。

さらに詩としての表現という、要素がある。この場面は、実話を取り入れつつも、詩句として、血液中を流れる毒が全身に回る様が見事に表現されていて、「血液循環説とは無縁の、単なる実話のドラマ化」とも思えない。血液循環説の意義を完全に理解した上で、それを詩的に表現出来る人の作品とも思える。それならエリザベス女王のために詩的な文章も書く文才を持っていたベーコンが書いた証拠にも取れる。しかし、「理工系の愚直さ」をもって自らも熱が分子の活性化であることを突き止めたベーコンによる血液循環説の理解と、出来上がった詩としての表現は別のものである。

ただし、「ストラトフォード人」シェイクスピアにも演劇の現場の人間として、ある種の「愚直さ」はあったかもしれない。つまり血液循環説の「理解」を試すために論文や報告書を書けと言われても出来ず、ひょっとしたら説明も出来ないけれど、ただ演劇に仕立てるといわれたら、天才的な腕を発揮して、実話の意味、医学的発見の意味を後世に伝えられるものに仕上げた腕を持っているのが、「演劇人」シェイクスピアだったのではなかろうか。すでに演劇論を闘わせる出版ジャーナリズムが爛熟していた当時、その人の評論はおろか日記や雑文の類までも何一つ残っていないことは、何よりそのことを示していると考えられる。

以上述べたことを、分かりやすく整理するため、例えば小柴昌俊が「カミオカンデ」によって宇宙線の動向を探りノーベル賞に至る経緯を演劇に仕立てることを考えてみよう。すでにテレビのいわゆるドキュメンタリー番組でいくつか半ば演劇仕立ての「小柴昌俊ノーベル賞受賞物語」は放映されている。これは実話なのだから、どのような仕立ての「演劇」にしようと、大雑把に真理をつかみ関係者が意気を感じて努力して最後に達成感を得る構想は変わらない。実際のインタビューで小柴を中心として関係者がはく言葉は、真理の探究に「愚直」にむかう人の言葉として、人生を考え、悠久の自然を思う、それだけでシェイクスピア作品にあるような哲学的な台詞とも取れる。

しかし、それは「観客」の側である程度努力をして聴き取れる言葉である。あまり物理学にもノーベル賞にも興味がない一般の人々を惹きつけるものではない。もし、ここに、演劇仕立ての「小柴昌俊ノーベル賞受賞物語」の中で関係者がはく言葉を、一般人が一瞬で理解でき、しかも人生を考え、悠久の自然を思う感動を味わえる詩の言葉に直せる人物があらわれ、台本

全体をそのように書き直してしまったらどうであろうか。

さらに、関係者が意気を感じて「愚直」に突き進む陰で展開する恋人、家族などのことを、恋愛感情についても、同じくらい人々に訴える見事な詩の言葉による台詞で表現して挿入したらどうであろうか。

全体がシェイクスピア作品のような輝きを持って、以後数百年継承される古典になる可能性は強い。

ただし、そのような才能を持つ人物は、まず小柴昌俊本人であることはあり得ない。また、大学を出て、演劇や物理学一般を教養として理解し、いっばしの様々な評論を書ける人である可能性も少ない。一般の劇作家でも難しい。一般の劇作家は、それぞれ自分の作劇法を持っていて、いきなり、それで小柴昌俊の「愚直」な偉業の表現になるような演劇を書けといわれても、なかなか難しいからである。

受験校の名門高校を出て、小柴の理論を理解できる訓練をしたものの、家庭の事情で大学に行かず、演劇に携わっても評論を書いたり自分の作劇法を持って脚本作家としてデビューすることもなく、ただ与えられた状況の下で的確な場面設定で的確な詩句を思いつくだけの才能を頼りに生きていて、演劇現場で既成作家の台本の手直しなどをしていた人物が、やがて小柴昌俊のことを知って、上記のような偉業をなしえた、ということならありそうである。

以上が小柴昌俊をペーコンに、演劇仕立ての「小柴昌俊ノーベル賞受賞物語」を『ハムレット』に見立てたシェイクスピア＝ペーコン説への反論と、なぜ梅原、猿之助が「天翔ける魂」を持つものとして意気投合し、シェイクスピア＝ペーコン説に魅せられたかの、本稿の立場なりの説明である。

ここで忘れてはならないのは、シェイクスピアの『ハムレット』も演劇仕立ての「小柴昌俊ノーベル賞受賞物語」と同じく、全体が「愚直」の行動で出来上がっていることである。

この場面のハムレット自体「愚直」に行動している。隠された殺人を暴こうとして王権に挑戦する。ロシア、中国といった左翼思想をひきずる国でハムレットをドンキホーテと結びつける伝統があることも、ハムレットに「愚直」の要素がある状況証拠になる。

もしも『ハムレット』について、オフィーリアとの恋愛的部分はカットするか縮小し、代わりにエセックス伯爵が反乱決行の際にシェイクスピア劇団に『リチャード二世』の王が退位するシーン（デポジション・シーン）を見たという史実を踏まえ、王権神授説を半ば信じて現在の王権を畏怖する心理を取り入れ、先王ハムレットの幽霊の登場も、キリスト教的な解釈を控え、権力の栄枯盛衰にまつわる事実上の「怨霊」として取り扱い、作品全体を宮廷の腐敗に「愚直」に挑むハムレットの物語として捉えれば、スーパー歌舞伎的な演出になるのではなかろうか。

宮廷の腐敗に「愚直」に挑むという単純な筋書きを西側諸国ではつい忘れてしまう。シェイ



「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝バーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

クスピア劇が持つ「単純さ」を思い起こさせる点ではスーパー歌舞伎の「単純さ」に価値はある。

そして大雑把な真理をつかんで「愚直」に行動するという、梅原、猿之助が意気投合した「天翔ける魂」を持つことは、小柴昌俊の場合には人類に貢献することになった。それは、つかんだ真理が本物であったからである。

ただし、先述したように、ニューヨークの世界貿易センタービルに飛行機で突っ込む。その報復としてアフガニスタンやイラクを攻撃する、といった行為に「愚直」という側面がないとはいえず、それぞれの立場に立ってみれば、それぞれの論理で世界を導く理想への想いがあり、「天翔ける魂」を持つことではある。しかし、その、それぞれの「真理」が本物かどうかは、歴史の審判を待つほかはない。

さらに、スーパー歌舞伎はいつの時代にもある普遍的な事柄を、日本の古代のこととして描き、歌舞伎として成立しているという要素がある。

ニューヨークの世界貿易センタービルに飛行機で突っ込む。その報復としてアフガニスタンやイラクを攻撃する、といった行為に、フセイン元大統領の処刑を加え、ブッシュ大統領がフセイン元大統領の追憶に、様々な面で悩まされる面がある事実（アルカイダの一派が、亡くなった貿易センタービルでの犠牲者の追憶に、悩まされるというより、そのためにナチスの残党なみにアメリカ軍から追跡されている事実もある）を語る形で、一連のテロと「テロ対策」は、時間が経てばドラマ化される可能性はある。

そうなったとき、上記の「死者の追憶」が持つ力を「怨霊」と解釈し、舞台を古代に移せば、そのままスーパー歌舞伎になるのではなかろうか。

ある意味ではフセイン元大統領の「死の追憶」より貿易センタービルでの犠牲者の「死の追憶」の方が重要な側面がある。というのは、ビジネス・エリートであった犠牲者の多くは、ビジネス、金融、株式投資で「天翔ける魂」を持って成功を目指した面がある。そのさらに背景に、ITを中心として科学技術の面で「天翔ける魂」を持って成功をめざしたし、今もめざす人々がいる。そうした人々の「愚直」な行動によって世界は現在動かされている。

さらには「2001.9.11テロ」で英雄となった消防士たちも、人命救助の使命感に燃え、自己の命を顧みず「愚直」に行動した「天翔ける魂」を持つ人々なのだ。

そう考えれば、設定が古代なのでつい現代とは隔絶して考えがちであるものの、スーパー歌舞伎の「天翔ける魂」は、現在というむき出しの現実に観客を向き合わせるものとも言える。

これが一見「単純すぎる」と見えるスーパー歌舞伎の「普遍性」（それは「シェイクスピアの普遍性」のある側面に通じる）であり、同時代性であり、梅原が二百年持つと豪語する所以であろう。その当否もまた、歴史の審判を待つほかはない。

ところで、梅原、猿之助のシェイクスピア＝バーコン好みにはエリートが非エリートを「見下す」方向とはむしろ逆の、ある意味ではむしろ非エリートを応援することにもなる、「愚直」

という要素が介在すると先述した。このことに関連して三島由紀夫の新作歌舞伎の「切腹」をめぐる迫真性について考察したい。それについては次項との関連が深いので次項で論じる。

(g) ホモセクシュアルに関わるもの

本項目に分類される米国学位論文を一つ紹介しよう。

ホモの問題を、プラトニックな友情とソドミーの問題に分け、ベーコンについて、その失脚を狙う告発の材料にもなったことを指摘し、自然科学の論文には自然を人格化した上で、その人格へのサディズムがあるとする。シェイクスピアの『冬物語』では、がっちりした男性が突然嫉妬に狂うということにホモセクシュアルの観点で分析できるものがあるとする。その他ミルトンにまで及ぶ、ホモの観点からの近代文学、近代社会の分析したもの<sup>37)</sup>がある。

ベーコンの自然科学の論文には自然を人格化した上で、その人格へのサディズムがあるとするのは、例えば人体の脳から末端の感覚器官への指揮命令系統のことであろう。脳の指令に従って「ハンドメイドの正確さ」で目や耳のような末端の感覚器官が反応する。こうした比喻をベーコンが使うことは、逆に英国社会で良い家に仕えるメイドの職務規律が正確無比であって、それはそのまま英国の「人治主義」が鍛え抜かれ、大英帝国を地上軍によって建設し、衰退させた「指揮命令系統」を偲ばせる。

前項で「広範な知識と感情体験の上にたった碩学にして行動の人で真のインテリだといっても、アメリカではそうした人を育てることも、そうした人に支配されることにもブレーキがかかる。むしろインターネットの発達で組織がフラットになることが歓迎される」と書いたことが、そのまま当てはまる論文ではなかろうか。つまりベーコンの自然観をサディズムとすることは、英国「人治主義」へのアメリカからの反発と解釈できる。指摘されてみれば、確かに英国「人治主義」は人が人を支配する体系なのだからサディコ・マゾヒズムと深く関わるのは当然のことだったと納得する。ただし、それを公言することは英国「人治主義」に対する痛烈な批判になりかねない。

この論文も、それと公言しないだけで、「シェイクスピア＝ベーコン」説の一手手前のような論文といえる。というのは、ホモの問題を、プラトニックな友情とソドミーの問題に分け、ベーコンについて、その失脚を狙う告発の材料にもなったことを指摘することは、従来シェイクスピアに対して行われてきたことであった。

しかし、それはよく考えてみれば十九世紀以降シェイクスピアが詩聖と祭り上げられ「シェ

---

37) Patterson, Steven J., *Pleasure's Likeness, The Politics of Homosexual Friendship in Early Modern England*, (1997).

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

イクスピア・カルト」といわれる現象が起きて後のシェイクスピア像を、十六世紀に反映させての議論であったことが、こうした米国学位論文に接すると気付かされる。

十六世紀当時のシェイクスピアは、まだ「詩聖」ではなかった。ホモだと言われたら体面を汚され失脚させられるような存在であったのだろうか。その点を含め、以下に「シェイクスピアがどうベーコンの『人格』を利用したか」について述べたい。それはホモについて考察することで実態がよく分る。

我々は「美」といえば、すぐに女性の美を考える文化環境にいる。しかし、シェイクスピア時代の文化は、むしろ男性の美を考えた。ベーコンの「美について」と題するエッセイの前半は、シーザーが登場する歴史上の偉人たちのオンパレードで、どこか釣り合いが崩れたところのない卓越した美は存在せず、法則ではなく作曲の才能に似た画家の才能が美を創造することも言う。

シーザーの良い男ぶりに魅惑されてローマ史を書くという日本の女流歴史小説家がいる。ベーコンが言う「美」とは、まず良い男ぶりのことであって、しかし、以下に引用するところは、シェイクスピアの『ソネット集』を想わせる。美少年への、かなりホモ的な愛ときわどく接している世界のような。

美は夏の果実のように腐り易く、長続きしない。多くは放縦な若者をつくり、少々立派とはいえない年寄りをつくる。しかし、それでもなお、うまくゆけば、徳を輝かせ、悪徳を赤面させる。

引用した「美は夏の果実のように腐り易く」「放縦な若者をつくり」に対応するシェイクスピアの作品はソネット九十四番である。誘惑に冷たい美少年を「傷付ける力だけがあって自分は何もしない」と非難した後

夏の花は夏に対して甘美だ  
自分に対して生き、死ぬだけが  
しかし花が野卑な病気にかかれば  
最も野卑な雑草がその権威において勝る

と続く。

ベーコンの「美について」というエッセイの書き出しは「徳は宝石のようで飾り気のないものに似合う。美しい肉体に宿ればいいけれど、デリケートな顔立ちでない方がよい。外見が美しいのではなく権威のある存在感がある」なので、どこか、シェイクスピアのソネット九十四

番は、真実の権威も結構だが、自分一人で朽ち果てるより、少しは誘惑を受け入れ、結婚した方がいいのではないかという「美少年に結婚をすすめる」文脈の中で、ベーコンのエッセイを辿りながら、その重々しくまじめ過ぎる感覚に反論しているようでもある。

これだけ並べば「シェイクスピア＝ベーコン」説支持者でなくても、シェイクスピアの「受け売り」に注目したくなる。ただし、シェイクスピアはベーコンの哲学を辿りながら、主張するのはその「重々しくまじめ過ぎる感覚」へのアンチ・テーゼであり、創作の産みの苦しみであり、「太古の昔から続く生の営みの中でのリビドーの力」「人間への信頼感が問題になる環境下での人間のエゴのせめぎあい」である。

たとえば歴史を鑑として政治や法律、人生の生き方を考えるというために歴史小説を書くのなら、フランシス・ベーコンは立派な文学者なのだ。シェイクスピアはそうしたベーコンの文学性を十分自己の作品に取り込みながら、さらに重苦しい法律も政治も、一般には決して堅苦しいだけではない柔軟で、それゆえに「立派な」人生論も、それをもさらに否定する文学感覚まで作品に生かす。ここまでの巾を文学で成しえた人はいない。シェイクスピアはベーコンを利用したからこそ成し得たと思う。

その上でホモとの関係について考えてみよう。一般論としてなぜ男性がホモ的な嗜好を持つのかは難しい。ただし、英国という国家を担うベーコンの場合は説明しやすい。国家を担うエリート特有のストレスと、そうした立場と表裏一体であるホモ嗜好が考えられる。一般に軍隊では一般社会ならホモにならない人までホモになるともいわれる。男性ばかりの社会でストレスがきつい。英国という国家を担うエリートには男性が多くストレスがたまることでは同様の社会だ。さらに、戦乱に明け暮れる我が国の武士と同様の感覚（衆道）が当時の騎士感覚にはあったと考えられる。

シェイクスピアの場合、「詩聖」に祭り上げられ「国家的詩人」となったのは後世の話であって、生きていたときにベーコンのような形のストレスがあったとは考えにくい。もう少し気楽な庶民的な立場であったのではなかろうか。その立場から国家を担うエリートの男性を観察していたのではないかと考えられる。これは根拠のない(といって状況証拠以外の根拠は挙げにくい事柄である)推定なのだが、シェイクスピアが長詩を捧げ、一時期パトロンであったサウサンプトン伯爵が、アメリカのヴァージニアに興味を示したことを指摘したと<sup>38)</sup>先述した著名な英国の歴史学者もこの立場に立つ。この歴史学者自身が労働者階級の出身であることも、おそらくこの立場に関係しているであろう。

つまりシェイクスピアは庶民の立場としてホモではなく、サウサンプトン伯爵などエリート特有のホモ的な環境に取り巻かれていたという立場である。この項の冒頭で紹介したように、

---

38) A.L.Rowse, *Shakespeare's Southampton: Patron of Virginia* (London: Macmillan, 1965).

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=バーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

バーコンもホモの疑いというスキャンダルに悩まされていた。

言い換えればエリートのホモセクシュアルと、非エリートのヘテロセクシュアルという分け方である。シェイクスピアは非エリートだからヘテロセクシュアルという論理になる。これは後述する別の理由で本稿も支持する。ただし、英米の現状を見れば、非エリートにホモがいないということは全く考えられない。一般論として、のんびり通常の恋愛をして結婚に至るといふ、ヘテロセクシュアルのみの世界に生きていられない激烈な環境があって人はホモになると考えられる。現代ではエリート、非エリートを問わず、そうした激烈な環境を生きざるを得なくなり、また何がエリートで何が非エリートかも定義が難しくなっている。過去においては英国ではオックスフォード大学、ケンブリッジ大学を出て、社会の中枢に位置する人々がエリートであり(現在もそれは概ね続いている)、日本では長く武士という支配層がエリートであった。それは子供のときから組織的に激烈な環境が用意され、ホモになる確率が高く、キリスト教的禁忌のない日本では「葉隠」に代表されるように、むしろ奨励される環境があった。

ここで三島由紀夫に触れてみたい。三島由紀夫がホモだったか否かということは、遺族から異議が出て裁判にもなることであり、直接は触れない。触れないというより、問題を三島の歌舞伎に限定し、その歌舞伎が描き出す世界が武士(もののふ)の道を作者がよく理解していたから新作歌舞伎であるにも関わらず古典歌舞伎と同じ迫力を持つことを論じたい。

一般的に武士と衆道とは関係が深く、美少年の美を愛でる能も、若衆歌舞伎の伝統を持つ(というより、それを禁止された歴史がある)歌舞伎とも関係が深い。

この衆道は、一般的な意味での英米のホモとは概念がやや違うと思う。強いていえば、シェイクスピア論で本稿が論じている、サウサンプトン伯爵やバーコンとの関係が疑われる「エリートのホモ」との対応関係を、「我が国の武士と同様の感覚(衆道)が当時の騎士感覚にはあった」と先述した以上、否定は出来ない。「英米エリートのホモ」「我が国の武士の衆道」「一般のホモ」を区別する必要はあると思う。

特に「我が国の武士の衆道」と「一般のホモ」を区別する必要についていえば、武芸などの修練を積み、大義のために命を捧げる覚悟を決めた激烈な環境ゆえに武士の文化ではゆるされたことと、あるいは環境が激烈であったり、本人の内面的な弱さ等の資質のために陥る事柄は区別すべきなのではないか。そうしないと森蘭丸との関係ゆえに信長までホモになってしまう。

さらに問題を能や歌舞伎に限定した場合も、一般に能が関るのは武士の道と関りの深い衆道である。歌舞伎にしても、すぐれた女形は、女性をただリアルに描くというより、伝統的で、禁欲的ともいえる厳しい倫理が前提にあって、その倫理により女心を抑えようとし、それでもなお女心を出してしまう抑制された女性の理想形を描くという。それは能の美の継承でもある。そして、たとえ庶民の女性を描いても倫理性が意識されることは同様である。一般のホモ、倫理性を意識しない、庶民にもある、演技すらも意識しない、リアルな生活におけるホモのこと

ではないと思う。歌舞伎の楽屋でホモめいた痴話話が話されようと、すべては歌舞伎の舞台が前提のことだと考えられる。

ただし、こうした考え方も「正統性の確立」が前提になっている。それが揺れている観も一方で否めない。それでもなお厳しい伝統的な倫理が前提になっている衆道と、一般的にオスがオスに惹かれるケースがあるという、倫理とは無関係のホモとは区別すべきである。

このことと、三島の新作歌舞伎が「切腹」をめぐる迫真性を持つこと、そして三島が「愚直」を愛したこと、さらに梅原、猿之助の「天翔る魂」やスーパー歌舞伎の普遍性との関係はどうなるのだろうか。

三島の新作歌舞伎は実際に「正統性の確立」がある歌舞伎役者の名優によって演じられ好評を博した時期があった。流行り廃りはあっても、三島の歌舞伎が今後古典の一角に座を占めることは、まず間違いないであろう。

「正統性の確立」において疑念の残る梅原、猿之助が持つ同時代性、シェイクスピアの普遍性につながるものを三島の新作歌舞伎が持っていたかといえば、こちらの方に疑念が残る。残るというより、三島自身が自衛隊に乱入し、切腹して果てたということにより、三島が「天翔る魂」を持って企て、「愚直」に実行しようとした革命ヴィジョンが、ある程度の共鳴者はあっても、哲学や文学の問題として日本全体をゆるがすことにはならなかったことを立証している。同時代性と普遍性についてテロ対策との関連があることを自ら実地検証したようなものではなからうか。その代償のように、現代に生きた作家として初めて古典の歌舞伎を創造する榮譽を担ったことになる。

三島は学識の上でも武士の道に憧れる意識の上でもエリートであった。しかし、「愚直」という点で非エリートの共鳴者をかなり得たことは確かだ。それは梅原、猿之助が自身は学術と歌舞伎の名門という形でエリートであったにも関わらず、「愚直」「天翔る魂」で非エリートを魅了し共鳴させたことと酷似する。

以上の考察をした上で、労働者階級出身で両親が文盲ともいわれる環境にありながら、オックスフォード大学出版部から数多くの著作を発表するほどの大学者になった歴史家であってシェイクスピア研究者でもあるラウズの見解にそって、エリートのホモセクシュアルと、非エリートのヘテロセクシュアルという分け方でシェイクスピア作品を生んだ環境が前者、シェイクスピア自身は後者という考え方をしてみよう。

これを念頭に米国シェイクスピア研究博士論文を見てみよう。

シェイクスピアやマーロウを中心にイギリス・ルネッサンス文学をホモ愛好とホモ恐怖症で

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

解析するもの<sup>39)</sup>は、ボーダーレス社会米国を表す。ホモとは性のボーダーレスであって、アングロ・サクソンやゲルマンの、密かな、裏側の民族的自意識でもある。ルネッサンスのラテン語教育を、ホモとコピー文化の観点で、リリーやシェイクスピア(『ウィンザーの陽気な女房たち』のページ・ボーイのシーン)から分析するもの<sup>40)</sup>もある。

アングロ・サクソンやゲルマンの、密かな、裏側の民族的自意識とは何だろうか。たとえばバレエ学校の女子生徒の立場に思いを寄せると言えば「お前はホモなのか」というからかいを受けそうである。それがまさに英国男性の悩みだと思う。映画「小さな恋のメロディー」も女子生徒のダンスレッスンを覗こうとして主人公の男の子が引っ張り出され、強引にレッスンを受けさせられて泣き出すシーンがある。また、最近、バレエをやりたい男の子と労働者階級の父親の確執を描いた、英国を舞台にし、まさに英国を描いたといえる映画があった。

こうしたことに隣接してホモセクシュアルの変化形である鞭打という英国の「悩み」がある。映画「小さな恋のメロディー」でラテン語の予習をさぼって鞭打たれるシーンがあり、シェイクスピア作品で鞭打ちが印象的な場面としては、『ウィンザーの陽気な女房たち』で少年ウィルがラテン語を覚えないと鞭で打たれることを示唆される場面がある。これもホモ嗜好の一形態である少年愛の変化形ではなかろうか。映画「小さな恋のメロディー」では、主人公役の美少年マーク・レスターの魅力が、幼い「恋」のために怠けて鞭を受けることでむしろ引き出され、エリザベス朝演劇においても、女役がつかまる美少年たちを舞台にのせ、その魅力を引き出す方法の一つとして尻の鞭打ちがあったのではなかろうか。『尻を裸にむきだされ鞭打たれた少年たち』(*Children Stripped and Whipped*)という題名だけしか残っていない当時の演劇もある。

いわゆるフェミニズムの分類を借用すれば「オンナ・コドモ」に関わる「教育としての鞭打ち」になる『ウィンザーの陽気な女房たち』で、少年ウィルがラテン語を覚えないと鞭で打たれることを示唆される場面で「ウィル」という名がウィリアム・シェイクスピアを示唆し、シェイクスピア自身の体験が挿入されているといわれる。ただし、そうした体験はきわめて一般的なものでシェイクスピアの個性としては何も読み取れないことを指摘する。(シェイクスピア「個人」の関りについては後で詳述する。)

英国においてホモは国家的、民族的「悩み」なのに対し、アメリカは「悩み」というよりオープンな政治闘争のようだ。ホモに寛容なアメリカ民主党左派を支持するか、ホモを厳格に否定する共和党右派を支持するか、という現実の政治闘争でもある。それがシェイクスピア研究論文にも反映している。

---

39) Reschke, Mark Peter, "More sharp than filled steel": *Homophilia and Homophobia in English Renaissance Literature*, (1995). MF||189||42

40) Pittenger, Elizabeth, *Pedagogy, Pederasty, and Pringing in the English Renaissance*, (1994). MF||189||24

そこからシェイクスピアとベーコンの違いを再び考えることができる。ホモ問題を「美形の男性をどう愛するか」に置き換えると、先に引用したシェイクスピアの詩とベーコンのエッセイは、そのまま英国的「悩み」と米国的「政治闘争」の違いになる。シェイクスピアは美少年に苦しめられ、悩み、傷つき、同時に愛の喜びを知り、創作に生かす。ベーコンは自分なりのモラルを適用して美形の人間の行動を冷静に観察し、おそらくは政治活動、大法官としての事件の裁きに応用したのであろう。個人的な「悩み」をしっかりと制御する姿勢がある。

だからといってベーコンの姿勢をホモの実態とは遠いとは言えない。「ベーコン的」といえる米国シェイクスピア研究博士論文を見ればわかる。

シーザーについて、英雄としての評価と独裁者としての否定的評価との矛盾を、イギリスのルネッサンス期、シェイクスピアの作品を通じて追及する論考<sup>41)</sup>は、強い男志向のホモ・エロティシズムと、多民族、大衆社会米国の特徴を表す。

戦場での死と愛、ベッドに押し付けられて死ぬという拷問とセックスをかけた表現など、マローウやシェイクスピアの作品をホモ・エロティックという観点から分析するもの<sup>42)</sup>もあるし、ホモセクシュアルの観点からのオーデン論ながら、そうした詩についてシェイクスピアとの関連も論じる論考<sup>43)</sup>もある。

これらはシェイクスピアというよりベーコンのエッセイに近い。詩人であるより政治家、法律家として自己のホモに向かう衝動を統御する方が本当の「悩み」かもしれない。シェイクスピアは基本的に恋愛を舞台にのせる詩人であって、恋愛の悩みの一環としてホモの「悩み」も取り扱ったとも言える。

また米国的「政治闘争」も決して実態を離れたものでないことは次の論文でわかる。

シェイクスピアとホモセクシュアルの関係について、歴史的展望をし、19世紀のオスカー・ワイルドとの関係から、20世紀初頭の浣腸を持ったイアゴー、最近のAIDSの流行にまで言及し、最後は、それらが逆に異性愛尊重を生んだとして、それがアイダホ州の感覚だと結ぶ論文<sup>44)</sup>がある。

こうなるとホモ・ワールドの治外法権でも目指すのかと言いたくなる。米国はそこまでホモを解放し、しかし国家としての「悩み」を政治闘争化もするのだ。

アメリカ共和党的理想の家族像、つまりいわゆるプチブル的幸福（それを強力に支持するこ

---

41) Yu, Jeffery J., *Renaissance Caesars and the Poetics of Ambiguity: Dramatic Representation of Julius Caesar in the English Renaissance*, (1995). MF||189||53

42) Foster, John Evan, *Beaux and Eros: Homoerotic Desire in Elizabethan Political Drama*, (1995). MF||189||56

43) Bozorth, Richard Robert, *The Angler's Lie: Auden and the Meanings of Homosexuality*, (1995). MF||189||57

44) Jun, Joon-Taek, *CounterCanonizing Heterosexuality: Sexing Shakespearean Male Bonding*, (1995). MF||189||80



「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

とがホモに不寛容になる)を否定するプチブル批判が存在するのは英国など旧世界の特徴だと思ふ。旅や恋愛について親子、兄弟で教訓をたれるプチブル家庭をポローニウス一家が披露する。その一見のどかで幸福な状況を根底から覆そうとするのがハムレットだ。

ハムレットに支持があるのは、自分たちのささやかな幸福に浸って他に不幸な人がいることを省みず、国家全体を考えないプチブルをやっつけるからだと思ふ。そのプチブルをやっつける行動の美学の元を辿れば、英国など古い国には必ずある古代からの民族の根源にある行動美学ではないか。資本主義的成功をかなぐり捨て、アーサー王の円卓の騎士になってもいい覚悟が、演劇、詩など旧世界文学の美学の根底にある。それはいささかホモ・エロティックでもある。同時に三島の新作歌舞伎の迫力と、その自衛隊乱入後に切腹という行動を思い起こさせる。

一方、アメリカはプチブル的幸福を否定する行動の美学を認める論理は、存在しないのではなからうか。資本主義的成功はチャンスの平等を与えた上での競争の結果であり、その結果得た成功を否定されねばならぬいわれはないことになる。古代の美学を夢想するとすれば、神権政体に決して偏ることのなかったローマ帝国であって、それは美学ではない。あくまで政治が個人の抱く理想などより優先される世界だ。しかも例えばローマ式の自殺に憧れるアメリカ人が多いとは思えない。強大な帝国をヨーロッパの価値観で築き上げた点にだけ共鳴するのだと思ふ。

ペーコンはロンドン市民の知恵と学問を結ぶ技術革命に寄与し、アメリカや科学技術理想郷の「ニュー・アトランティス」に想いを寄せる。しかしアーサー王の円卓の騎士になってもいい覚悟といった旧世界の美学は少なくとも強調しないと思ふ。ロンドン市民と手を結ぶ傾向は、むしろチャンスの平等、科学技術立国でブルジョアの成功を否定せず、逆境にある人々にもチャリティー精神と自己実現を促す励ましを与える立場だと思ふ。それは現在のアメリカに近く、その状況を反映した米国シェイクスピア研究博士論文に近い。

この中に世紀末とワイルドとホモとの関係で、ワイルドがシェイクスピアのソネットをホモ裁判で持ち出したことを例とし、リチャード二世の女々しさと藝術好みもあわせて、ホモ論を展開するもの<sup>45)</sup>もある。

これをどう解釈すべきか。

英国は兵が強くローマ時代から主にヨーロッパ大陸諸国への傭兵供給国であった。祖国には女性と子供が留守家族としている。母による男の子の訓練はあっても、自らは働かず戦わぬ貴族同士の権力闘争が間近にあって、その直接の支配を受ける大陸のような状況ではなかった。英国を表す古くからの言い伝え「馬の地獄、召使の牢獄、女性の天国」は、この事情、つまり傭兵供給国で女性と子供が留守家族としていて、母による男の子の訓練と、その延長として年

---

45) Rock, Paul J., *From Boys to Men: Male Identities, Sexuality, and Fin de Siecle Criticism*, (1995). MF||189||77

若い召使が厳しく訓練される状況を表すのではなからうか。注目すべきはヨーロッパ大陸のような「貴族、僧侶の天国」ではないということなのだ。その中で文学は貴族文化というより厳しい訓練を受ける人々の慰みという面があったと思う。

つまりドイツと同じ軍隊的訓練重視の環境なので、リルケ的体験と詩に向かう姿勢（リルケは軍隊学校の訓練に耐えかねて逃げ出したことが詩作の原点）に対応してリチャード二世の女々しさと藝術趣味があるともいえる。（これは若き日に軍隊を恐れる言動をしながら、やがて自衛隊乱入と切腹への「愚直」な行動をした三島と無関係ではないと思う。その、必ずしも現在では世界的な共感を得られない「天翔る魂」がなすヴィジョンは、かつての枢軸国側のヴィジョンと関係していて、現在の英米機軸の趨勢の中では受けがよくない。しかし、それはリチャード二世的な女々しさとして矮小化できない側面がある。まずリチャード二世はシェイクスピア劇の登場人物として第一級の詩人である。同時に、ハムレットがロシア、中国の伝統で左翼思想とドンキホーテに重ねられるとしたら、ハムレットとリチャード二世は、ともに人生を深くえぐる詩の言葉ををはきながら、行動しようとして逡巡し、環境と刺し違えて死ぬ美学を持つものとして、例えば三島の日本的な美学を重ねることも可能なのだ。）

これに関連したベーコンの言葉がある。

「人間の弱さと神の安寧を兼ね備えることが真の偉大さ」というセネカの言葉を引用し、それを認め、「それを描くのに忙しいのが詩人」というベーコンの「逆境について」というエッセイの中の言葉である。「そうした超越が許されるのが詩の世界」と続く。

「人間の弱さを克服する」のが軍隊的訓練である。そこから逃げ出して詩を書くのがリルケであった。その事情は、その三百年前のベーコンの著作を髣髴とさせる。

ベーコンはシェイクスピアの作品よりはローマの古典詩人を念頭において、この言葉を言っている。シェイクスピアがベーコンとは別の人格であれば、シェイクスピアも含まれるであろう。詩人と哲学の違いをはっきり指摘している。確かに「人間の弱さと神の安寧を兼ね備えること」が「真の偉大さ」と認めた上で、それは詩のようなフィクションの世界でだけありうる詩人の絵空事とでも言わんばかりに、詩人を揶揄するとさえ読み取りたくなる調子で、「そうした超越が許されるのが詩の世界」とする。古典文学を「奇妙なフィクション」とも言う。「迷信排除」を唱える「科学者」ベーコンは、かえって「詩」という虚構を良く理解していたとも言える。なぜなら哲学とははっきり違うフィクションの存在を少なくとも存在として認め、その主題が「人間の弱さと神の安寧」という風に、きちんと規定するからである。

シェイクスピアはまるでベーコンが定義した詩人の通りに作品を発表していったように見える。ただし、仮に「庶民の立場での人生観察記録」がその作品であったとしよう。（この点については後で詳述する。）ベーコンは「国家を担う自らを含めた激動の人生観察記録」がその作品であり、ワイルドは「国家と対峙する自らを含めた激動の人生観察記録」がその作品

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

であった。

ワイルドはホモについて裁判でシェイクスピアの『ソネット集』を引き合いに出しながら弁明し、それを含め『ソネット集』が描く世界を現実世界で演じてみせ、ホモを禁止する国家と対峙し、重労働の刑罰を課せられながら戦った。このように死ぬまでホモ的な愛に生きるのは、あるいは「人間の弱さ」であったかもしれない。しかしそれを公然と現実世界で貫くのはひとつの強さではある。その強さは国家と対峙する程のものであった。そして「神の安寧」を求めたには違いないけれど、現実世界では得ることはかなわなかった。

ベーコンは逆に国家を担う形で「強さ」を保持したまま激動の人生を生き抜き、同じく「神の安寧」は得られなかったものの、文学に深い理解を示し、ギリシャ・ローマの古典文学について、特にセネカの思想について鋭く批評し、詩の世界での「神の安寧」の実現を認識した。

これらすべてについてシェイクスピアはベーコンの筋書き通りに詩人として生き、作品を残し、しかも「神の安寧」も得られたように思う。ただし、それは「庶民の立場での人生観察記録」としてだからではなかろうか。つまり、「国家と対峙する人を観察する」「国家と対峙する人を含むホモ的な愛の実態の観察記録を発表し、後にそのような実人生を生きる作家を生む」ことはあっても、自らはあくまで庶民であったのではなかろうか。庶民とは決して国家を担うことはなく、国家を担うものによって常にコントロールされるだけの弱い存在ではある。弱いから様々な苦しみも受ける。しかし、あきらめに似た心境があって、その意味では国家を担ったり国家と対峙する人には得られない「神の安寧」があるともいえる。

普通ならそのような「庶民」は教育がなく才能がなく作品は書けない。人間観察の知恵があっても作品化は無理なのだ。それが出来たのがシェイクスピアの稀有な天才ではないか。別の言い方をすれば教育があって才能があって国家を担う超エリートたちと付き合いながら、しかも「庶民」の立場を貫いた稀有な才能なのだ。

それは度々指摘するようにグラマー・スクールで充実した教育を受けながら大学に行かず、すぐにロンドンの演劇界に入り、当時のエリートグループと関係を持ったことによるのではなかろうか。

それが証拠に、何度も繰り返すように作品しか残っていない。評論も、日記も、・・・とにかく個人としての痕跡を残すようなものは何一つ書かないし、おそらくは書けない詩人だったのではないか。それが「人間の弱さと神の安寧を兼ね備えることが真の偉大さ」を実現し、後に神とまで崇められる仕掛けであったのではなかろうか。

それは人間と自然との関係について深く考えることでもある。

キリスト教やイスラム教と砂漠の苛烈な自然、仏教とインドの自然といったものに比べても、イギリスの自然は「庭のイングランド」といわれるように優しい。遮るもののない平野が広がり、周囲から攻められたら自然の地形に頼って国を守ることは出来ない。常に強い軍隊を必要

とし、しかも、特権階級がのさばって強固な人工のシステムが築き上げられるわけではない。

優しい自然と向き合い、人間がスクラムを組むことだけで外敵に対抗し、むしろ周囲の海を征服して世界に乗り出したイギリス人の精神性は、ここに根ざしているのかもしれない。人間のスクラム、つまり英国という国家の成立に、他国よりはさらに人間と人間の関係が関与している。それが英国流「人治」主義として大英帝国の発展と衰退に関わった。それは国家を担い、国家と対峙する文学者を多く生み出した。その中に、ひとり国家を担い国家と対峙する人物を十分に描きながら、自らはそうした人々にコントロールされるばかりの弱い立場（つまり庶民）を貫いた文学者がいた。それがシェイクスピアではなからうか。

「小柴昌俊ノーベル賞受賞物語」になぞらえてシェイクスピア作品の性質を先述したことに続けてこのことを敷衍すれば、小柴昌俊のエリート性と庶民性ということでも、このことを説明できる。小柴昌俊は自己の業績を振り返り、いわゆる第一級の秀才でなかったから成し遂げられたとする。それは真理を大づかみにして「愚直」に行動することを意味している。こうした行動形態は、本来庶民のものである。庶民は真理を大づかみにするしかないから「愚直」に行動する。一方、エリートは真理を精細に把握でき、困難を乗り越えて行動しなくても、その知識を維持発展するだけでそこそこの成功を収められるので、あまり「愚直」に行動することがない。

小柴昌俊の場合エリート性と庶民性を兼ね備えたので大成功した。同じことがシェイクスピアについても言えるのではないか。

思えば、「人間の弱さ」を他国との戦争に振り向けることで得手勝手な「神の安寧」を目指したのがドイツのファシズムかもしれない。ヒットラーは傍迷惑な征服絵図を描いた藝術家であり、ベーコンが言う「奇妙なフィクション」を、軍事力を使って現実に構築しようとした傍迷惑な詩人であった。それに比べればベーコンからドイツのファシズムとは違う「訓練国家」の指導者の、十分に自制がきいた見識を読み取ることが出来るのである。

ドイツ、イギリスに共通のホモ・エロティシズムが国家を動かすという論考<sup>46)</sup>ではイギリスではパブリックスクールの個人主義、文藝に向かう感覚がファシズムに向かうことを阻止したという。そのパブリックスクールの文化を生む土壌は、セネカを引用したベーコンの見識にも伺われる。

ここで再び鞭打ちについて触れ（ファシズムとは違う「訓練国家」、パブリックスクールといったことと関係が深い。つまりサディコ・マゾヒズムと深く関わると先述した英国「人治主義」の源泉なのだ）米国学位論文が主として主題にする成年男性のホモ・エロティシズムを念

---

46) ジョージ.L.モッセ,佐藤卓己・佐藤八寿子訳,『ナショナリズムとセクシュアリティ——市民道徳とナチズム』, (バルケマイア叢書,1996).

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

頭におき、その変化形としての鞭打ちで、はっきり「サディズム」といえるものが関わるのは、シェイクスピア作品ではアントニーの「嗜好」(『アントニーとクレオパトラ』で、落ち目になったアントニーが使者を鞭打たせる場面) くらいであることを指摘したい。落ち目になったアントニーが明らかに「その趣味」にはまった感覚で鞭が十分使者を苦しめたかを確認しようとする。その他の鞭への言及は「オンナ・コドモ」に関わる「教育としての鞭打ち」(少年愛の変化形であると先述した) が大半である。「オトコ」の趣味は、この例くらいしかないのだ。

ここから推定されるのは、後世数百年にわたって論議されたシェイクスピアがホモかどうかといった議論は、シェイクスピアその人に関わるなら「オンナ・コドモ」の部分であって、「オトコ」の部分ではないのではないかということである。さらにいえば、このアントニーの鞭打ち嗜好はシェイクスピア自身の趣味が作品に反映したものではなく、かつて国家を担う立場にあった者が落ち目になってその趣味にはまることを良く知っていて、そうした人間観察を作品化しただけではないだろうか。

シェイクスピアもワイルドも詩人なのだから「人間の弱さと神の安寧を兼ね備える真の偉大さ」を自制することなく目指していたともいえる。ホモ的な嗜好は「神の安寧を兼ね備えることで真の偉大さを獲得しようとする人間の弱さ」とベーコンなら言うかもしれない。それは国家にとって危険なものでもある。ベーコンの時代には、それでも許容されていた面があった。やがてヴィクトリア朝の強い禁止を経て、イギリスでは国家の「悩み」となり、米国では文字通りの政策の争点となる。

こうした問題をシェイクスピア作品に関わらせて論じるとき、国家の「悩み」ならシェイクスピア自身の創作と関わるかもしれないものの、ホモをめぐるアメリカ民主党左派と共和党右派の対立は、先述のように、私にはシェイクスピア作品がベーコンを利用した部分に関わることに思えてならない。文藝より政治なのだ。シェイクスピア作品に政治を語る迫力があるのはベーコンを利用したからではないか。

そして利用されるベーコンと利用するシェイクスピアの基本的な違いは、国家を引受ける責任感だと思う。ベーコンは自分の政治的立場を賭けて実際の宮廷政治、法曹界、哲学論争の世界を生き抜いた。シェイクスピアはそれを横から見て実に器用に演劇化しただけではなからうか。

その点を、『リア王』で長女、次女に裏切られ、嵐の荒野をさ迷うはめになったリア王を道化が評して「娘を母親にして鞭を持たせ、ズボンを下ろし(裸の尻を鞭打たれるために) たようなもの」だと、母親が息子の尻を鞭打つことを示唆する場面(これは道化自身がリア王に鞭打たれることを示唆されての応酬で、道化と鞭の関わりは頻出する。『リア王』の道化は女役をつとめる美少年がコーデリアと二役したという説もある)で考察したい。

例えばディケンズのように、父親がその資力がないのにプチブル的生活をし、少年時代のディ

ケンズは工場労働者にまじって働かされた経験をし、妹はプチブル的生活を維持したことに対する恨みなどがあって、社会を中流階級と下層階級と両面から見る広い人生観を獲得し、それが作品に反映されている場合とは、全く違うと思われる。

つまり子役から成長して成年男子の役者になってゆく過程では、美貌が失われてゆく悲しみを経験し、老いを現実の年齢より早く感じる特殊な感覚が育つ。同時に（実際に、あるいは感覚的に）老年を迎えると、少年時代に受けた尻の鞭打ちが思い出されるということも、シェイクスピア本人のことかどうかはさておき、周囲の人間観察から得られることではなかろうか。そうした心境が『ソネット集』にも綴られ、演劇作品より本人の個性が出やすいのが詩だとされて『ソネット集』の詩人もシェイクスピアその人としての解釈がなされる。しかし、これも考えてみれば詩人として詩劇の座付作者として生きた人物の、周囲にいる人間を観察してのことだとも考えられる。役者や詩人の世界は、現実の国家を担う責任を感じないだけに、いつまでも「オトコ」になれず、「オンナ・コドモ」の世界のままという面がある。

「オンナ・コドモ」の鞭打ちの世界と、かつて「オトコ」であって、老年を迎えて「オンナ・コドモ」の世界を思い出す人間の側面を観察したことが結合したのが『リア王』の「娘を母親にしてズボンを下ろし」というシーンではなかろうか。

そう考えれば、シェイクスピアは自己の体験ではなく、周囲の人間を観察することで、器用に演劇が組立てられたと考えた方がすべての辻褄があうように思われる。

もしシェイクスピア＝ベーコン説が正しくて、その作品をベーコンが書いたとしたら『アントニーとクレオパトラ』では、オクタ비아ヌス・シーザーの描写がもっと素晴らしいものになったのではなかろうか。国家を担う責任感、ホモだけでなく女性との関係についても自制する禁欲があって・・・といった性格を、自分自身の体験から描写できる。

シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』が描くオクタ비아ヌス・シーザーは、十分そうした性格が描かれてはいるものの、どこか主役の二人に比べスケールが小さく、現実世界で尊重されても文学の世界では尊重されない性格になっている。ベーコンなら、そのようには描かないのではなかろうか。

ディケンズの場合は、文豪と呼ばれ、偉大な作家と呼ばれる。シェイクスピアは十九世紀以降の「シェイクスピア・カルト」の風潮を反映して偉大な作家と呼ばれることもあったものの、概して天才と呼ばれることが多い。これも、作品から滲み出す作家像を、四百年かけて人々が捉えた結果ともみえる。また、そういう観点からいえば、シェイクスピアはホモ的な人間性を周囲から観察して作品化した人ではあっても、本人がどのような性癖があったかは分からない。ただし四百年間も多くの女優が作品を演じ、庶民的感觉（ということはホモに対して顔をしかめ、ごく普通のヘテロな愛に喜びを感じる大多数の人々の感觉）で愛されてきたという事実が、シェイクスピア自身は全く普通の性感覚の持ち主であったことを示唆しているように思

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

われる。

それにしても、シェイクスピアの『ソネット集』とワイルドの裁判、そしてセネカの思想について考えることは、シェイクスピアについて考えることが人生を深く考えることであるということの、ひとつの象徴のようにも思う。

イラク戦争では米国に協力し軍隊を派遣した英国は、同時にイスラムとの融和もはかり、シェイクスピアの複雑な人間理解にイスラム的な面もあることを、イスラムの識者が語り波紋を広げ、その論争が「シェイクスピア=イスラム教徒説」にまで発展したと先述した。

この「宥和政策」が有効であるためには、ラウズが提唱し、後世の反応を考慮して本稿でも支持したシェイクスピアはホモではないという説が必須条件になる。というのは、イスラム教は世界で最も厳しくホモを禁止している宗教だからである。

欧米で一つの流れになっているホモ解禁の動きは、イスラムとの「宥和政策」ゆえに、皮肉なことにイスラムとの敵対関係を助長することになる。またブッシュ大統領の支持母体になったキリスト教原理主義はホモを禁止している。テロと「テロ対策」で対立する両者がともにホモを禁ずる宗教を奉じていることになる。

本項目は特にラディカルに「テロ対策」について欧米とイスラム世界の精神状況を反映することになる。